

---

# I S V S 灵子甲胄

山上真

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS VS 靈子甲冑

### 【NZコード】

N4466Y

### 【作者名】

山上真

### 【あらすじ】

ISという兵器の登場によって女尊男卑の世となつた昨今。

そんなある日、あるニコースが世界を騒がせる。

それを契機に、秘密部隊『帝国華撃団・花組』隊長の大神総一はある任務を言い渡される。

サクラ大戦シリーズとISのクロスです。

時代的にサクラ大戦側はオリキャラで固められています。  
キャラ改変、独自解釈、捏造設定があります。

原作を読み返しつつ、ある程度書きためてからの投稿になるので不

定期更新となります。  
感想お待ちしております。

## プロローグ（前書き）

リハビリがてら書いてみました。  
楽しんでいただければ幸いです。

## プロローグ

「おおおおおーーっ！」  
「はああああーーっ！」

響き渡るは少年少女一人の咆哮。僅かに遅れ、甲高い音が断続的に鳴り響く。……見れば、二人の手にはそれぞれ刀が握られている。模擬刀かと思えば然にあらず。紛う事なき真剣である。

ISというものが世に広く浸透している昨今を考慮しても、それはおかしな光景だった。

二人の年頃はどう覗眞目に見ても十代半ば。それでいながら、二人は己の手足の如く刀を扱っている。一心同体と言つても過言ではなかつた。

であればこそ、尚のこと腑に落ちない。

スポーツとして広まっているISがその実兵器であることを鑑みれば、少女に關しては無理矢理だが説明付けることが可能だ。『長らくISと共にあり、刀を武器としている』……と。

しかし、少年に關してはそうもいかない。……何故ならば、ISは女性にしか動かせないのだ。それが絶対とは言えないが、常識として扱われているほどに可能性が低いのもまた事実。では、この光景が示しているのは一体何なのか？

「いや、久々にいい訓練になつた。礼を言うよ、おおがみそうち桜華」  
「フフ……それはこけらのセリフだよ、大神総一隊長？」

一人の会話の中に、その答えの片鱗があつた。

どうやら一人は軍人か何からしい。ISが兵器としての地位を占める昨今では非常に珍しいことではあるが、だとするならば両者の技量にもいくらか納得がいく。それでも、その年齢に対する疑

問はぬきないが。

「……嫌みを言つのは止めて欲しいな、真宮寺の姫君？」

「それは失礼。だがこれ位は許してもらいたいな？ 任務に守秘義務があるのは理解しているが、私たちの間ではそれも幾らか緩和される。隊長が長期に渡つて隊を離れるというのに、副隊長の私は司令から伝えられるまでその事実を一切知らなかつたのだからな？」

ジト目で言つてくる桜華に対し、総一は謝るほかになかった。

世界各国が秘密裏に連携して行つて、靈的なモノに対する都市防衛機構『華撃団』。……諜報、輸送、戦闘など様々な隊から成つており、総一は日本における戦闘部隊の隊長である。

靈的なモノに対処する以上、戦闘部隊員は強い靈力を保有していることが最低条件なのであるが、同時にそこが問題点でもあつた。

世界は広く、靈力の保有者は山ほど存在している。しかし、戦闘時におけるパワードスース『靈子甲冑』<sup>りょうしきこうちゆう</sup>を起動できるほどに強い靈力保有者となるとそつはいかない。

突然変異を除けば、ある程度血統を頼ることは出来る。事実、総一も桜華もそのクチだ。特に桜華の生まれである真宮寺家は『破邪の血統』と謳われるほどで、代々強力な靈力保有者が現れている。

それでも限度というものがあり、戦闘部隊は常々人員不足に悩まされている。

強い靈力保有者は基本的に若い女性に多く、総一のよつに男性でありながら強い靈力を保有しているのは非常に稀だ。……歴代隊員の血統でも、男であれば靈力を持つていない、といつのはザラである。

今回、総一が隊を離れていたのもそんな人員不足によるものであり、いくら慌ただしかつたとはいえ、それを桜華に伝え忘れたのは明らかに総一のミスなのである。……親しすぎるが故の弊害であった。

その血統故に幼い頃から交流を持ち、互いに切磋琢磨しあつて来た二人は、大概のことを言葉にせずとも察することが出来る。

それに違わず、桜華も総一が隊を離れている事実及びその理由を察してはいた。これが私事であれば然程問題もないのだろうが、生憎と公務である。

察しは出来てもそれが正しいとは限らない以上、事実確認は必要なのだ。

今回は桜華が誤魔化したために事なきで済んでいるが、これが発覚した場合は面倒事が舞い込むだろう。司令から『頼み事』という名を借りた実質的な処罰が下される。

総一個人で済めばいいが、そんな美味しい話はないだろ？。何かしら周りを巻き込むハメになる。

「……本当にすまん」

それを理解しているからこそ、総一は謝るしかないのだった。

「……疲れた」

桜華と別れてから数時間後、総一は肩で息をしていた。

戦闘部隊隊長とはいえ戦闘ばかりしているわけではなく、寧ろそれ以外の仕事の方が圧倒的に多い。

まずは離れていた期間に溜まつた書類仕事。それが終わつたら歌唱訓練である。

古来より、歌と踊りには魂を鎮める効果があるとされている。

故に、華撃団に所属する者たちは表向きの顔として芸能プロダクションを運営している。……日本の場合は『浪漫の嵐』という名称で、総一や桜華もその例に漏れず、歌つて踊れる男女混合ユニット

『BLOSSOM』のメンバーとして所属していた。

しかし、総一は個人的に歌唱を苦手としていた。周囲の評価は低くないのだが、総一自身は身体を動かしている方が好きなのだ。振り付けをしつつ……となれば話は別なのだが、ただ歌うだけとなると一気に疲労が押し寄せる。

それでも事の重要性を理解しているので、基本的に真面目な総一は文句を言うことがあまりない。……以前に文句を言ったのは、する必要のない女装を強要されたときぐらいである。

「いよいよ！ お疲れだなあ、大神いー」

不意に背後から如何にも脳天気な声が掛けられた。振り向くまでもなく、総一は声の主が誰なのか分かった。

加山雄輔。総一の幼馴染み兼親友兼悪友であり、諜報部隊の隊長であり、『BLOSSOM』のメンバーでもある。

如何に疲れていても、誰かが近付けば流石に分かる。それでも声を掛けられるまで総一が気付かなかつたのは、それだけ加山の陰形が見事であることを証明していた。

「ああ、疲れた。だから、悪いが今はお前の軽口に付き合つてやれんぞ？」

「ふむ、それは残念」

おちやらけた様子でそう言つたかと思うと、次の瞬間には相変わつた真面目な声で加山は言つた。

「…………大神。つい先刻、IS学園の試験会場で何かが起こったらしい。これから調べに言つてくるが……俺の予想が正しければ事態は一気に動く」

まだ何が起こったのかは分からぬらしいが、にいつた場合の  
加山の直感はよく当たる。

それ則ち、『面倒事の到来』である。  
予め覚悟を決めておけば、こぞこの身に降りかかった場合でも割  
と冷静に対処することが可能になる。

「…… どうか。情報、感謝する」

「いいってことよ。それじゃ大神、アティオース！」

再度脳天気な声を発し、次の瞬間、加山は音もなくその場から姿  
を消した。

「…… 申し訳ありません。もう一度お願いできますか？」

加山より忠告を受けた、その数日後。

帝国華撃団司令室において、部屋の主たる司令よりある任務を告

げられた総一は、そう問い合わせた。

内容を理解できなかつたわけではない。寧ろこれ以上ないほどに  
理解できた。しかし、だからこそ問い合わせ返さずにはいられなかつ  
た。

任務内容を簡単に言えば『IJS学園に入学し、織斑一夏を護衛。  
場合によつては華撃団ヘスカウトし、他にも有益な人材がいた場合、  
その者もスカウトせよ』……と、こうである。  
これは問い合わせ返さずにはいられない。

護衛だけならば、まあ分からぬでもない。平均的な同年代の者  
と比べれば、自分が遙かにテキると自認している。剣術も修め  
てゐるし、靈的戦闘ではあるが実戦も経験している。極めつけに護  
衛対象と同性である。護衛のしやすさを考えれば、自分がその任に

就くのは妥当と言えるだろう。

分からるのは『IS学園に入学』の部分である。自分の歳を考えれば高校に通うのは問題ない。寧ろ普通である。しかし、この部分だけは納得する事が出来ない。

織斑一夏という例外が現れたとは言え、ISは未だ女性のモノだ。……平たく言えば『IS学園』は女子校なのである。そこにどうやつて自分が通えというのだ。

華撃団は任務内容が内容だけに、通常の軍隊　日本の場合は自衛隊　と比べてもその権限は遙かに大きい。普通に考えれば分かることだが、靈的存在に対して通常の武力など役に立たないからである。

故にその権限を用いれば通えなくもないだろうが、実行できなければ意味がない。

権限を使用できるのは、あくまでも『靈的存在が認められた場合のみ』なのである。　緊急事態においては独自の判断で使用することも出来るが、そんな緊急事態など滅多なことでは起こらないし、使用後に提出する書類の量がバカにならない。

そんなわけで、IS学園が実は『靈的現象を起こすことを目的とした秘密結社』でした……などといった場合でない限り、その権限は使用できないのだ。

より詳しく言えば、華撃団は秘密部隊であるために表立った階級はないが、それでも総一は平常時から少尉相当の権限を保有している。これでも充分と言えるが、靈的存在が絡んできた場合、脅威の度合いによつて左官や将官までその権限が跳ね上がるのだ。ともかく。

その事実を踏まえれば、今回の任務は自分より桜華向きである。世間における『IS学園』の立ち位置を鑑みれば、少尉相当の権限で出来ることなどたかが知れているはずだ。

また、大神総一と真宮寺桜華を比較した場合、性別の違いこそあれ、その腕前と実戦経験に大差はないという事実もある。

そして分からぬ点がもう一つ。織斑一夏のスカウトだ。……これは絶対ではないようだが、そこに至った経緯が見えてこない。

「うん……君の疑問はもうともだ。通常ならば桜華君の方に命じていただろう」

総一の疑問を汲み取つてゐるのだろう。答える司令の声は柔らかかつた。……元より『司令』という立場にしては柔らかい言葉を使う人物ではあるが、冷徹になるべきときはどこまでも冷徹になれる人物もある。

それを踏まえた上でこいつた言葉で返してくることを鑑みれば、真宮寺桜華ではなく大神総一でなければならない理由があるということだ。

そしてそれは、『当たれば儲け』的なモノではあるが、当たつたときの配当が巨大であるという事実も示している。

「I.S存在が今世を形成することになつたのは否定しない。……が、それも必要悪だ。……何故か？　かの兵器によつて多大な技術革新がもたらされたのも、また事実であるからだ。無論、巨大な光は相応の闇を生むし、その点では見逃すことは出来ない。だが、それは何もI.Sに限つたことではない。今回はたまたま、I.Sによる『技術革新』という名の光だつた、という話でしかない。まあ、如何に現行兵器を凌駕する威力を持つていようとも結局は物理兵器である、という点も我等がI.Sそれ自体をそこまで危険視していなかつた一因だがね。……しかし、織斑一夏の存在がその認識を覆すこととなつた」

総一は司令の言葉に同意する。少なくとも、華撃団員の認識は皆似たり寄つたりだった。

それをここに来て否定するに至つた。そして、その原因となつた

のが織斑一夏。先の命令と今回の言葉。そこから見えてくるモノは一体何だ？　総一は思考する。

認識を覆された、と言っている以上、ISは靈的脅威たりえるといつことだ。だが、真にそうであるならばもつと早くに発覚して然るべきである。しかし、織斑一夏が表立つまでそんな動きはなかつた。

では、織斑一夏と他のIS起動者の違いは何だ？　織斑一夏は男性であり、他のIS操縦者は皆女性だ。

そして、男性なら誰でも良いわけではなく、織斑一夏でなければならぬ理由がある。また、女性も起動確率が高いだけであり、その全員が起動できるわけではない。

（おいおい、ちょっと待て……。これは、どこかで聞いたような話じゃないか……？）

思考を重ね、総一はある結論へと行き着いた。

そもそも、総一が今ここでこいつして話を聞いているのも強い靈力を保有しているからであり、大神家の実績によつて十五の若さで隊長という任に就いているからである。

そうでなければ、『今ここでこいつして話を聞いている』という事実は起こり得なかつた。

そして、大神家の実績を語る上でも総一が華撃団にいる理由を語る上でも外せないのが靈子甲冑である。

靈子甲冑とは『靈力ありき』で開発されたパワードースーツだ。

時代の流れと共に使われる技術や形状は変化していくが『起動に強い靈力を必要とする』といつ点は今になつても変わりない。そして一方のISだ。

ISのコアはブラックボックスそのものであり、開発者である篠ノ之束が発表した事柄以外は一切が不明。

そして篠ノ之束自身、『ISの起動に何を必要とするのか分かつ

ていない』可能性が高い。……これは当初の発表から考へる限り可能性は高いだろ。宇宙空間での活動、つまりは宇宙開発をするに当たつて、女性しか動かせないのでは意味がない。

なのに発表したのは、篠ノ之束の認識では『男女とも動かせることになつていたからではないだろか。そして、こゝで重要なのはあくまでも『篠ノ之束の認識である』といつ点だ。

篠ノ之束は自他共に認める天才だ。独力でE.Sなどといつものを開発した以上、総一もその点に関しては認めている。

その一方で『自分の興味のないことにはとことん無関心』といつ話もある。この無関心は人間関係にも当て嵌まるらしく、自身の妹である篠ノ之篠、件の織斑一夏、その姉である織斑千冬くらいうしか親しい人間はいないとも聞いている。

この、自分を含めたごく狭い範囲の四者に共通する部分があつたなら、篠ノ之束は『人類全てに共通する』と認識するのではないだろ。そして、E.Sの起動にこの共通部分を必要としていたならばどうだらうか。

人類全てに共通するという認識ならば、わざわざその事について考へる必要もなれば解明する必要もない。その結果として世間一般での認識が『E.Sを起動できるのは女性のみ』になつたとすれば……。

「E.Sの起動には靈力が必要。……違いますか？」

自身の至つた結論を、総一は司令へと確認した。……その声音は冷静そのものだが、表情まではそうはいかない。驚愕がありありと浮かべられていた。

「そう……君の驚き通りだよ。簡単にではあるが織斑一夏を調査した結果、彼が男性にしては珍しい靈力保有者であることが認められた。靈子甲冑の起動には至らぬものの、その靈力値は男性として充

分に高い。そしてそこから調べられる限りの E.S 操縦者を調査した結果、保有量の差こそあるものの、その全員が靈力保有者であるという結果が出た。……無論、以前にも E.S 操縦者を調査したことはあつたし、靈力を保有しているという事実も判明してはいた。しかし、調査したのは五名にも満たず、対象が何れも女性であつたために、『賢人機関』はスルーしてはいたようだ。……華撃団の求める靈力値には遠く及ばないといつ事実もあつたらしげけどね

果たして、司令の答えは肯定であつた。

それが真に事実ならば、この命令も納得がいく。

男の靈力保持者は貴重であるが、そこには確固とした理由が存在する。

そもそも、靈力それ自体は万能である、といつのが通説だ。しかし、実際にそんなことはない。……何故ならば『発現形質』と『靈力性質』に左右されるためである。

炎、冷氣、雷、或いは瞬間移動や治癒、身体強化などが発現形質に当たり、その分類は多岐に渡る。また、人によっては複数発現できたりするが、大抵の場合は一極特化である。

そして、個々の持つ靈力の特性を俗に靈力性質といつ。

今は紐育の華撃団戦闘部隊である『星組』隊長の任に就いている大河星司と総一は、この靈力性質が特殊なのだ。

彼らの靈力性質は『触媒』である。その性質故に、彼らは他者と靈力を重ねることが出来るのだ。

譲渡であれば、他の隊員たちもやつてやれることはない。

しかし、相乗できるのは現時点において総一と星司だけなのだ。

この靈力性質は、文字通りの万能性を秘めている。そして、未だ男性にしか確認されていないのがポイントである。

現時点では纖斑一夏をスカウトしたところで即戦力には成らないだろう。しかし、その将来性は大きい。もし靈力性質が『触媒』だとするなら尚更だ。

だが、それも前提条件が間違つていなければの話である。総一がISを起動することが出来なければ、この話は始まることなくそこで終わりだ。

「失礼します。打鉄を持つて参りました」

当然、そのことは織り込み済みだつたらし。まるでタイムングを図つていたかのように、量産型工場の一つである打鉄が司令室へと運び込まれた。

「さて、論より証拠。早速確認してみるとじようか、総一君?」「はっ」

司令に促され、総一は打鉄へと触れた。

「ぐう……つー?」

瞬間、ナニカが繋がつた。それが総一の感想だつた。ISに関するおびただしいまでの情報の数々が、意識へと直接流れ込んでくる。……その影で、己を見つめる存在がいることに総一は気付いた。

(何だ……? 僕を見ている……? 男? それとも女? ……わからぬ。今はまだ、遠すぎる)

それは刹那の邂逅だつた。邂逅と言えるかもわからない。次の瞬間、総一は我知らず打鉄を動かしていた。

「ふむ……どうやら推測は正しかつたようだね」

司令の声に意識を浮かび上がらせた総一は、しゃがみ込んで打鉄を脱着した。……実に自然で、まるで『よく見知った物を扱つているかのよう』だった。

そして敬礼し、命令を復唱した。

「了解しました。大神総一、IS学園への入学、及び織斑一夏の護衛スカウトの任に当たります」

「うん……よろしく頼んだよ、大神隊長」

（まさか此程までに偏つてゐるとはな。男性教諭が一人もない。それも困るが、何よりも授業がIS関連に偏りすぎだ。曲がりなりにも高校なのだから、これは問題がありすぎないか……？）

現在IS学園の廊下を歩きながら学校案内を読んだ総一の感想がこれだつた。

こうして廊下を歩いている以上、IS学園への入学自体は問題なく出来た。だが、ISの動作に関して問題があつた。

普通に動かす分には問題ないのだが、戦闘行動を取らうとすれば上手く動かないのだ。

これは靈力が過剰注入されるためであらう、というのが総一の至つた結論である。

靈力を動力源にしているところは同じだが、ISと靈子甲冑の設計思想、設計理念は当然の如く異なつてゐる。

靈子甲冑の場合は攻防移全てに靈力を用いるが、ISの場合は防

バリアー や絶対防衛 だけらしいところを見てもそれは明らかだ。

無論、そのままで問題があるので対策は練つた。

それに実体験から、最適化<sup>フィットティング</sup>が進めば問題は解消される、と総一は踏んでいる。……初期設定時と一次移行後の動きを比べれば、そうとしか思えないのだ。

異例ながら発現した単一仕様能力<sup>ワンオフ・アビリティ</sup>の存在が、その推測を後押ししてくれる。

もつとも、単体では何の意味もない能力だ。なにせその名前からしておかしい。『隊長』なのだ。その効果は、作戦を発令することによりISの『コア・ネットワーク』においてチーム登録しているメンバー——自分を含む——の攻防移に補正を掛ける、である。……靈子甲冑で出撃しているときと然程変わりない。

そのことから鑑みても、後は時間の問題<sup>トコトコ</sup>ということである。

しかし実際問題、その時間がどれくらいなのか分からぬから困りものだ。

「まあ、上手いこと立ち回つてみせるさ」

不利な状況など慣れたものだ。何せ靈的戦闘<sup>トコトコ</sup>というものは基本的に後手に回るものなのだから……。

それを思えば、これもまた大差はあるまい。

総一には経験からくる自信と自負がある。

そして、たとえISという未知の舞台といえど、それらの経験を転用できないはずはない。

それに、正直に言えば総一は楽しみだった。

総一はその仕事柄、普通の学校に通うことなど出来なかつたのだ。今までの勉強は全て華撃団の関係者に教わってきたのである。

つまり何が言いたいのかといえば、総一は同年代との付き合いに飢えているのだ。同年代の友人など華撃団の関係者ぐらいで、それ

以外は仕事上のドライな関係でしかないものである。

IS学園も決して『普通の学校』とは言えないが、それでも学校であることには変わりない。

この年齢になつての学校デビューであることも相俟つて、総一は心底から『友達百人』をつくる気である。

そうして、総一は意気揚々と教室に入つていった。

## プロローグ（後書き）

一話当たり何文字くらいが妥当なんでしょうか……？  
自分の場合、最低五千字は突破するようにしているのですが……。  
お教えただければ執筆の目安になるので助かります。

「いよいよですか……」

そう呴いたのは、鮮やかな金髪が映える青眼の少女であった。名はセシリ亞・オルコット。IS学園の新入生である。

日本に来るにあたり、セシリ亞にはある目的があった。イギリスの代表候補生という立場にある以上、ISの操作能力向上とブルーティアーズのデータ取りが第一であることに違はない。そのためにIS学園に通うことを選んだのだし、余儀なくされたのだから。

しかし、それはあくまで公人としての目的だ。 私人としての目的は他にある。

私人、セシリ亞・オルコットの目的。 それは『ある男にもう一度会う』ことである。

だが、ただ会うだけでは意味がない。 会うべくして会う必要があるのだ。 でなければ、名前も居場所も知っている以上、既に会いに行っている。

初めての出会いは偶然の産物だった。……ならば、その男に会うのは次も偶然の産物によるものでなくてはならないのだ。

あの男は自分の慢心を打ち碎いてくれた。 だから、その点には感謝している。

しかしそれと同時に、自分のプライドをも打ち碎いてくれたのだ。

だから、その点に関しては恨んでも仕方ないだろう。

あの男に抱いたのが感謝の念だけだったならば、素直に会いに行つている。 しかしそうでない以上、自分から会いに行くのは我慢がならない。

そう、『偶然に次ぐ偶然』という過程を経て、今度こそ自らの言葉で己の名をあの男に刻み込み、そしてその次には『必然』として

出逢えるよつにする。……それこそが、私人、セシリア・オルコットの現時点における最終的な目的だ。

「ああ、待つていなさい。わたくしは必ず目的を果たしてみせますわ。そのために必要だといつのであれば、運さえも味方に付けて差し上げましょう……！」

言葉にすること、今一度意志を確かなものとする。……セシリア・オルコットは静かに氣炎を上げた。

不意に、ゾクリときた。

それを表に出すことなく、総一は静かに警戒を強めた。

靈能者であり剣術家でもある総一にとって、この手の感覚は慣れ親しんだものだった。もつとも、事が実際に起こったとて、その脅威度は千差万別であつたが……。

(さて、当たりか外れか……)

視界内に織斑一夏の姿を認め、総一は心中で呟いた。

華撃団の存在を知っている政治家の中にも、当然の如くその役目を疑問視する者はいる。何せ時勢が時勢だ。『そんな曖昧なものに注ぎ込む金があるのなら、その分を新たなISの開発に回すべきではないのか』……といった考えを持つ者がいるのは至極妥当であるだろう。

実際に靈的現象に対処している総一としては困りものだが。

ともあれ。

そういうた考え方の者たちに華撃団の有意性を示すためにも、此度の護衛任務はありがたかった。そういうた考え方の者たちは、華撃団

の実戦部隊を『強い靈力保持者の集まり』としか認識していないからである。

確かにそれも間違つてはいないが、あくまでそれは最低限の条件である。実際に配属されている隊員の多くは、何かしらの戦闘技術を修めていたり、そうでなくても優れた能力を持ち合わせている。事実、総一は二天一流を修めているし、桜華は北辰一刀流を修めている。

そこで重要となつてくるのが織斑一夏である。『世界で唯一 I.S を動かせる男』という肩書きは強い関心を引き寄せている。実際には総一も動かせるので唯一ではないのだが。

華撃団の上層部である『賢人機関』、技術協力している『神崎重工』の上役たちは『I.Sを起動させるには靈力が必要』という結論に至つているが、世間一般には謎のままである現状、織斑一夏はあらゆる意味で狙われやすい。

織斑一夏を『世の男性にとつて希望の星』と表せば分かりやすいだろうか。

表向きには技術的な意味で狙われやすい。現在判明しているあらゆるデータとこれから取得できるであろうデータを女性のそれと比較することで、『男なのにI.Sを動かせる理由』が判明するかもしれないのだ。

そして女尊男卑を招く要因がI.Sにある以上、それが分かれば男女平等にまで持ち直せるかもしれないのだ。

これは大きい。仮に科学的な理由を証明できたならば、それを発表した国は世の男性陣からの多大な支持を得られることだろう。

そして、だからこそ大半の国が身柄を確保しようとしているはずだ。

確かに、I.S学園は国際規約で『学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対しても一切の干渉が許されない』と定められている。がしかし、今現在そんなものは既に有名無実の代物と化している。

故に、今じつじつといる中でも、あらゆる国家あらゆる組織が動いている筈だ。

結婚などで合理的に確保しようとする分には何も問題ない わけではないが、結婚は個人の問題であるために口出しし辛い が、それに紛れて秘密裏に確保しようとする所も間違いなく存在しているだろう。

そして裏向きには『世界を絶望で満たす』ために狙われるだろう。得た希望が容易く無へと帰したならば、後に待つのは絶望だ。世界の男女比はおおよそ半々。その内の半分が一斉に絶望の海へと沈むのだ。

靈的見地に立つ者としては、その後に起ることなど考えたくもない。文字通りに世界が滅んでも不思議ではないだろう。

故に、織斑一夏を見事に護つてみせれば、華撃団を疑問視する政治家たちに『華撃団は役に立つ』と考え直せることが出来るはずだし、起こり得る災厄を未然に防ぐことにも繋がるはずなのだ。

そんなわけで、このよつな悪寒が起ることは、総一にとって寧ろ望むところであった。

(しかしあま、彼も災難な事だ……)

警戒はそのまま、総一は護衛対象に同情せざるを得なかつた。織斑一夏にとつて 大神総一じぶんを除き 周りの人間は全部女性。しかも席は最前列の中央……つまりは教卓の真ん前という最も目立つ位置。挙げ句の果てには向けられる視線の数々。

見ていて可哀想になるほど緊張しているのが丸わかりだ。

男という点で見れば総一も同じであるが、彼の席は最後列だ。それに表の仕事柄視線を向けられることは慣れている。それに加えて、興味本位で眺めるだけならわざわざ後ろを向くよりも前や横を見た方が楽なためか、総一に向けられる視線は想像以上に少ない。だからこそ、総一には同情を抱くような余裕があつた。

(HRまでまだ時間はある。……休み時間を予定していたが、今  
内に話しておくるか)

総一は席を立ち、静かに、それでいて自然に、一夏の席へと向か  
つていった。

「いや、君も大変だな。織斑一夏君？」

自分に掛けられたその声に対し、何よりもまず『助かった』と一  
夏は思った。

女性の群れの中に男子は自分一人だけという事実もあり、一夏と  
しても覚悟は決めてきたつもりだった。しかし、所詮は『つも  
り』でしかなかつたということだろう。これは想像以上にキツかつ  
た。

一応『HR直前に入室していらなく目立つ真似をするよりは、前  
もって入っていた方がマシだらう』といつ考えの元に早めに来たの  
だが、いつまで経つても視線の雨は止まない。

いい加減にどうにかなるんじゃないかと思ったところで、救いの  
主が現れたのだ。

誰かと会話でもしていた方が時間の経ち具合も早く感じられるだ  
ろう、と自分でも思っていたのだが、助けを求めた先　幼馴染み  
の少女である篠ノ之箒ひとしづに無視を決め込まれて諦めていたところ  
でこれだ。その喜びも一入である。

(ああ……神様つて本当にいるんだな。神様ありがとう)

思わず神様に感謝を捧げてしまつたが、声を掛けられて何の返事

もしないのは失礼だ、と返事を返そうとしたところで何かが引っ掛けた。

何だ

「もしもし？ 聞こえているかい、織斑君？」

と思つたところで再度声が掛けられ、直ぐに答えが出た。声が低い。声が低い女性もいるだろうが、この低さは男性のそれだ。

その答えが出ると同時に、ぐるん、と勢いよく一夏は声の主へと振り向いた。

果たして、声の主は男だった。充分に美形と言える顔立ちは微苦笑を浮かべている。しかし、何よりも一夏の目を惹いたのはその佇まいだった。凛としている、と言えばいいのだろうか。ただ立っているだけだというのに、美しさと力強さを感じさせてならない。

「あ、ああ……聞こえている。悪い。男は俺一人だって聞いてたら、驚いて反応が止まつてた」

「まあ無理もないさ。俺は他人から視線を向けられることには慣れてる方だけど、それでもこれは結構くるものがある。……取り敢えず自己紹介といこう。俺は大神総一だ。君と同じく『男なのにISを動かせた』ってことでこの学園に通うことになった。動かせた理由は……有り体に言えば偶然の産物だな。『BLOSSOM』ってグループは知ってるかい？ 俺はその一員なんだけど、メンバーの一人がISを題材にしたドラマに出ててね。俺もそれに急遽端役で出ることになつたんだ。まあ撮影自体はすんなり終わつたんだけど、事が起つたのはその後だ。片付けを手伝つたときに偶然ISに触れたんだが、そしたら何の因果が起動したってわけだ」

流石に眞実を言つわけにもいかず、表向きの理由を言つて総一は

カバーストーリー

笑つた。

なるほど。芸能界のことなどサッパリだがそういうこともあるだ  
らう。　総一の説明に一夏は納得した。

しかし、同時にこうも感じた。『本当にことを語つてているが  
真実は語つていない』……と。

何故そう感じたのかは一夏自身にも分からぬ。本当にただの直  
感だ。けれど別に構わなかつた。  
これもまた直感でしかないが、総一は信じられる、と一夏は感じ  
たからだ。

そんなわけで一夏もまた自己紹介をしようとしたところだ

「きやあああああ！」

「まさかとは思つてたけど！」

「本当に『BLOSSOM』の総一君…？」

「サインちょーだーい！」

爆発と言わんばかりに周りの女子が騒ぎ出した。

それから暫し。

総一の自己紹介に周囲の女生徒たちが騒ぎ出し、結局一夏が総一  
に自己紹介することなくHRが始まった。

(これは……別の意味でキツイ)

一夏は心中で呻いた。　出席番号順での自己紹介。……それは  
いい。別に構わない。進級に伴うクラス替えがあるかは分からぬ  
が、少なくとも一年間は一緒に勉強することになるのだ。自席の周  
りや気になる人物を確認する意味合いで、自己紹介というものは  
必要だ。しかし、この歓声は一体何だ。自己紹介でこんな歓声が上

がるものなのか。というか、他のクラスに迷惑だろ。」

HR前と同じく、総一が自己紹介した途端にこの騒ぎである。

少なくとも、この騒ぎが治まるまでは一夏が自己紹介する意味がない。こんな状態で行つたところで、騒ぎに呑まれてお終いである。

（だからこそ、こうして考えてられる余裕があるんだが……）

しかしそれも長くは保つまい。程なく自分の番がやつてくれる。その時、自分はどのように自己紹介をすればいいのだ。……よく知らないが、総一は有名人らしい。所謂『芸能人』といつやつだ。この騒ぎはそれも一因なのだろうが、何よりも総一の自己紹介の上手さが理由だろう。この衆人環視の中で、彼は如才なくやつてのけたのである。真似しようにも、とてもじやないが無理である。ひょんな事から有名人になつてしまつたが、そこに自分の意志は介在していないのだ。結局のところ何が言いたいのかといえば、『周りがどう思おうとも織斑一夏は平々凡々な小市民である』ということだ。

（そんな俺が、どうやつたら自己紹介を上手くやれるってんだよ……！？）

一夏が心中で絶叫している間にも周囲には静寂が戻りつつある。いや、戻つた。それと同時に、幾多もの視線が自分に向けられる。

（えーい、こうなつたらヤケだ……！ やつてやるー やつてやるよー）

自分に克を入れ、勢いのままに口を開く。

「名前は織斑一夏。皆がどう思つてるか知らないけど俺はしがない小市民なんでもダに何かを期待するのは止めてくれ。ただ掃除洗濯

に関しては一日の長があると自分でも思つてゐからそこいら辺は頼つてくれても構わない。まあ何はともあれここに通つことになつた以上最初は不慣れもあると思つが皆と仲良くやつていきたいと思つ。どうかよろしく

一夏はノーブレスで言い切り着席した。自分でも何を言つたか曖昧だ。変なことを言つてなければいいんだが……。

少しばかり余裕が戻つてきてから気付いたが、周囲は未だにしないでいる。どうやら呆気に取られているようだ。一夏が思い至つた途端に後方からパチパチという音が鳴つた。

振り向く。視線の先では大神総一がその手を叩き合わせていた。

「フム……まあ良しとしておいてやるわ」

それを確認したと同時に、またも自分の後方 副担任である山田先生がいた場所、つまりは教壇 から、今度は声が聞こえてきた。しかし、山田先生の声ではない。

一夏はその声に聞き覚えがあった。いや、そんなレベルじゃない。よく知つてゐる声だ。この『俺にのみドラの効果音付きで聞こえてくる、トーンの低い声』は、自身の姉、織斑千冬のものに他ならない。

至つた結論に対し、そんなバカな……、と思いつつ、一夏はまるで鎧び付いたロボットの如く ゆっくりと振り向いた。

黒のスーツにタイツスカート。その背はすらりと高く、ボディライインは見事の一言。胸の前で組まれた腕。その鋭い目つきは、まるで狼を思わせる。……思い違いでも見間違えでもなく、正真正銘、織斑千冬がそこにいた。

「な、んで……？」

何でここに千冬姉がいるんだ？ そう問い合わせようとした一夏の声は、しかし言葉として機能しなかつた。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかつたな」

田の前で交わされる会話に一夏は理解が追いつかない。だが、そんな一夏をお構いなしに状況はどんどんと進んでいく。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言つことはよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。逆らつるのは個人の自由だが、私の言つことには従え。いいな」

千冬の自己紹介はこれ以上ない暴力宣言と同義だった。しかし、その言葉は一夏を落ち着かせる効果を果たした。

この『田の前に織斑千冬がいる』という現実を、ただただ一夏に納得させたのだ。織斑千冬の理不尽さをこれ以上ないほどに知つている一夏にすれば、諦観を抱くのは慣れたものだったものである。だが、一夏のテンションと周りのテンションはどうやら違つりしい。総一のときよりもなお凄まじい黄色い声が教室の中を飛び回っている。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられると。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

心底うつとうじうといつ表情で千冬は毒を吐く。だとこうの、元のうつとうじうといつ女生徒の黄色い声は止まない。

「あーもうやかましい。いい加減に黙れ。騒ぎたりないんならグラウンドを十周でもしてこい」

その言葉と共に、教室内からはピタリと音が止んだ。……先程までの喧騒が嘘のようである。

「初めからそういうバカどもが……。そら、時間は押してるんだ。次の奴、とつとと自己紹介をしろ」

千冬効果は絶大ということなのだろうか。そこからは順調に自己紹介が進められていった。

## 第2話

(さて、どうしたものかな……?)

一時間目の休み時間、総一は行動を決めかねていた。視線の先では、ある女子生徒が護衛対象へと声を掛けている。  
篠ノ之箒。織斑一夏の幼馴染みにして、ISの開発者、篠ノ之束の妹。

四方八方から見られているこんな状況では、落ち着いて話をすることが出来るのはがない。……少なくとも、加山の情報を信じる限り篠ノ之箒には無理なはずだ。

となれば、必然的にどこかへと移動するだろう。  
護衛としては付いていくのが正しいのだが、総一とて情を知る人間である。

久方ぶりの再会、その上に篠ノ之箒の事情も鑑みれば、邪魔をしあくないと思うのが人情というものだ。

(とは言え、目を離すわけにもいかないからな……。仕方ない。遠目に窺うぐりいは許されるだろ?)

一人が席から離れたのを見計らい、気落ちしながらもじく自然に総一は起立する。

「少々、よろしいでしょうか?」

「……ええ。とは言え、ここではなんです。教室から離れませんか?」

「構いませんわ」

「では、少々歩くとしましょう」

横合いから掛けられた声に、総一の反応は僅かに遅れた。

知人である。同じクラスにいることは分かつていたが、話し掛けられるとは思つてもみなかつたのだ。

だが、これ幸いと総一は話し掛けってきた人物 セシリア・オルコットを誘導する。……こんな状況だ。教室の外へと誘つのは何らおかしな事ではない。

「しかし、まさか話し掛けられるとは思つていませんでしたので……少々、驚きました」

視界の中に一夏と篠の姿を確認し、廊下を歩きながらも総一はセシリアへと告げた。

「……無理もありませんわね。お恥ずかしい話ですが、あの時のわたくしは、ただ『男』というだけで見下しておりましたから……。言い訳にしかなりませんが、やはり重圧<sup>プレッシャー</sup>やストレスに参つっていたのでしょうね。オルコット家を継いでから……つまりはたつた三年会わなかつただけで、幼き頃よりの親友が男だということすら忘れておりましたもの。その事実に気が付いたときは愕然としてしまいましたわ」

そう言つて、セシリアは静かに笑つた。

いい笑顔だ、と総一は素直にそう思つた。

セシリアとの出会いは、以前、総一が仕事で欧州へ赴いた際に遡る。

全てではないにしろ、代表候補生ともなれば国内に限つては相応の知名度を有しているものだ。それ故に、メディアへ出でる「」とも少なくはない。

セシリアの場合は、見目麗しく、名門貴族である『オルコット家』の当主という追加要素もある。メディアへの露出は必然と言えた。

さて、欧洲にはある実話を元にした物語が存在している。その起源は新しめで、日本でいえば太正時代に当たると言われている。

主人公は日本よりやつて来た黒髪の男。ヒロインは五名で、その内訳は修道女、貴族の娘が一名、サークル団の少女、世間を騒がせた大悪党となつていて。……この六名が舞台となるパリの地で次から次へと起こる怪事件を解決していく、というお話だ。

そのタイトルを『黒髪の貴公子』というこの物語は、欧洲全域で多大な人気を博している。しかし細部は非常に不鮮明で、ハッキリしていることなど紹介文に書かれてていることくらいしかない。だが、主人公とヒロインの名前も不明だからこそ自由度が高く色々なストーリーが創られており、そうして創られたストーリーがあるいは加えられ或いは削られていったからこそその人気である、とも言われている。

今までにも何度も映像化されている『黒髪の貴公子』だが、またもや映像化する運びとなつた。いつもと違うのは『主人公には黒髪の日本人を起用したい』という監督の強い拘りが反映されたことである。

そこでスポットを当てられたのが総一だ。

総一の聞いたところによると、当初『若い』という理由で監督は却下したかったようだが、（ス）ポンサーの面々フランスの名門貴族であるブルーメール家、（北）大路家、シャトーブリアン家、ライラック家、更には欧洲全域にその名を轟かせるホワード技研、果てはイタリアでも屈指の名門、『赤い貴族』と謳われるソレッタ家と鉢々たる顔触れだからの強い推薦に断り切れなかつたとの事である。

まあ、実際に動きを見せた後は両手を挙げて歓迎されたのだが……。

ともあれ、主人公が若いのでヒロインの年頃もそれに合わせ、ヒロインの一人である『貴族の娘』としてセシリアが選ばれた。この共演が一人の出会いである。

そして当時、総一はセシリ亞からどこか張り詰めた空氣を感じていた。それをどうにかしたくて話しかけたり料理を作つたりと色々やってみたわけだが、結果は芳しいものではなかつた。

しかしそれがどうだ。今のセシリ亞は自然体であるように見受けられる。

自分にはどうすることも出来なかつたが、良い方向へと向き直つてくれたのは素直に嬉しいことである。

歩きながら話を聞いていた廊下は抜けていた。

降り注ぐ陽の光と肌を撫でる風が心地よい。

「なので大神さん、わたくしはあなたに感謝しておりますのよ？あの時、あなたの剣を見ていなければ……今もきっと、わたくしは慢心したままだつたでしようからね。……ええ、ですから、ありがとうございました」

そう言つて、セシリ亞は総一へと頭を下げた。そこにわだかまりは感じられない。少なくともセシリ亞にとつて、この件で総一に頭を下げるは前々から決めていたことであり、何ら厭うことはない。その一方で、頭を下された総一としては堪つたものではない。総一個人がセシリ亞に行つたことで感謝を受けるのならば、それはそれで問題なく受け止めることが出来る。しかし、セシリ亞の言葉を聞く限りではどうも違うようだ。

セシリ亞は『剣を見て』と言つた。総一が覚えていた限り、セシリ亞の前で剣を抜いたことは一度もない。となれば、セシリ亞が言つているのは撮影時、或いは自己鍛錬をしていく時のことだらう。……どちらにせよ、総一自身の意図はない。

撮影時のことと言つてはいるのであれば、それは仕事だからだ。公人としても私人としても全力で臨んだが、それでセシリ亞に対してどうこうという意志は微塵もなかつた。

自己鍛錬にしても同じ事だ。打ち合つ相手がない以上、それま

で疎かにするわけにはいかないということだけのこと。やはりセシリアに対してもう一つという意志は持ち合わせていなかつた。

だからこそ、こうして頭を下げるるのは非常に困る。総一の意図するところではないにせよ、総一が影響を与えたところでは間違ひがないから尚更だ。

「……頭を上げて下さい。俺個人としては、あなたに何かをしてやれたという実感がないのです。無論、俺個人の感情は別として、感謝の念はありがたく頂戴します。それを固辞するのは、あなたを侮辱する行為に他なりませんからね。……しかし、身に覚えのないことで頭を下げるるのは、その、どうにも心苦しいのです。ですので、こちらを助けると思つて頭を上げてくださいませんか？」

総一は困惑を隠しきれないままにそう言つた。

これが加山や桜華相手であれば、もつとざつとばらんと言つていふのだが、彼らとセシリアの立ち位置は違うのだ。

これが公人として礼を言つているのであれば、IRSの先輩ということで下手に出るのも吝かではない。だが、今回の彼女は私人として礼を言つている、と総一は受け取つた。

その点を加味すれば、上から言つのもダメだし、下手に出すぎるのも良くはない。……総一にとつては何とも難しい話である。

正直、この対応で合つてゐるかどうか自信がなかつた。

「……では

と言つてセシリアは頭を上げた。

それに総一はホッと息を吐く。事は出来なかつた。……セシリアの纏う空氣が一変していったからである。

「……次の話へと移らせていただきますわね？ 率直に言えば、

わたくし、負けず嫌いなんですの。……で、ですね？　あなたは確かにわたくしの慢心を打ち碎いてくださいましたが……それと同時にわたくしのプライドをも粉微塵に打ち碎いてくださいました。となれば……これはリベンジするしかないでしょ？」「

そう言つてセシリ亞は嗤つ。

ゾクリ、と総一の全身を怖気が走つた。それと同時に、H R 前に感じた悪寒の正体に気が付いた。

これはマズい。何をしたのかは皆田見当も付かないが、この空気は桜華やシャルロットを始め、女性陣を怒らせた際のそれと同質のものだ。

（くつ……俺はどうすればいい。俺に一体何が出来る。……教えてくれ、そして助けてくれリヴァイアス！）

空氣に耐えきれず、総一は遠きパリの地にいる親友にしてシャルロットの義兄、リヴァイアスへと心の中で助けを求めた。……現実逃避とも言つ。

総一の経験上、このテの空氣を纏つた女性は厄介事しか運んでこないのだ。

「……俺に、一体何を望んでいるんだ、セシリ亞・オルコット？」

絞り出すように総一は言つた。……最早、言葉を取り繕う余裕など持ち合わせていなかつた。

「今は秘密とさせていただきますわ。まだ準備が整つておりませんので……。大丈夫ですわ。それほど時間は掛からないはずですから……」

「……了解した。皆田見当もつかないが、俺に非があるのは間違い

なじょうだしな……。何であれ、甘んじて受け入れるとじよつ

諦観の念を抱いた総一が言ひと同時、一時間目の開始を告げるチ  
ヤイムが鳴り響いた。

「それでは戻りましょうか

颯爽と歩み去るセシリアを追い、総一もまた歩き出した。……一  
夏もまた幕の後を追つていてるのが、視界の端に微かに見えた。

「ほんと全部わかりません」

一時間目の授業中、『わからない』といふがあつたら訊いてくださいね』との山田先生の言葉に対する一夏の返答がこれであった。

その言葉を受けた山田先生の態度が一転し、先程まで胸を張つていた、思いつきり顔を引き攣らせたのが、総一の目にハッキリと映つた。

山田先生がそうなるのも無理はない。

総一とてそこまでこうのことが分かるわけではないが、それでも今授業でやっていることぐらいは分かる。

IS学園に入るに当たり、事前に参考書には目を通しているし、技術者の方からも説明を受けたからだ。……当初、件の参考書がやたらと分厚いことにげんなりとしたが、その実わかりやすく纏められており、スイスイとページを進めたのは記憶に新しい。

そして、今日は初日で今の授業は一時間目だ。……つまり、今やつているのは『初步の初步』という事である。

それを『わからない』と言わてしまえば、教師としては困りものだらう。

「え、えっと……織斑君以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

それでも、何とか気を取り直したらしい真耶が確認を取る。……当然の如く、誰一人として手を挙げる者はいなかつた。

「な……！？ 大神、まさかお前もわかるつていうのか！？」

それを見た一夏が驚愕も露わに総一へと問い合わせた。

「いや、俺からすればこの時点で『わからない』っていうのがわからないんだが……？ 確かに仕事の関係もあって参考書にも全部目を通したわけじゃないが、今やつてているのは最初の方に載つてたぞ？ しかも結構わかりやすかつたし……。織斑君も大変だったとは思うけど、俺ほど時間が取れないわけじゃなかつたと思うんだが……？ 仮に参考書に目を通していなくても、政府から教育役が派遣されているはずだ。何せこの学園はそのシステム上、事前学習が欠かせない。しかしISの特性上、余程の物好きでなければ男にそれは望めない。こういう言い方はアレだが、俺や君は世の男性陣にとって『希望の星』なんだ。そして自発的な協力が得られれば、データ取りであれ研究であれ進展が早くなる。そこを踏まえれば、参考書だけ渡して『入学までに勉強しておいて下さい』なんて有り得ないんだ。事実、俺に対しても技術者が派遣されてきたし、その技術者は『織斑先生が君の教育役』だと零していたんだが……？」

困惑しつつ、総一はそう返した。……寧ろ、そうとしか返せなかつた。

「そうなのか？ 俺は千冬姉がこの学園で教師をしていくことすら、

今さつきまで知らなかつたんだが……」

総一の疑問に一夏はそつ答え、その視線を千冬へと移す。……一夏だけではなく、教室中の視線が千冬へと突き刺さつた。

「ゴホン……織斑、貴様工の参考書はどうでした？」

「実は……家の掃除をしたときに古い電話帳と間違えて捨ててしましました」

「やれやれ……仕方ない。あとで再発行してやるから由を通じておけ」

千冬はそう言つて山田先生に授業を進めるように指示した。この対応は、先程までの千冬の態度からは考えられないものである。故に、それを見ていた一同の心は一致した。……則ち『誤魔化した!』である。

「ちよつと、よろしくて?」

「へ?」

一時間の休み時間、不意に声を掛けられた一夏は素つ頓狂な声を出した。

鮮やかな金髪が映える青眼の少女。美少女と評するに充分だが、その言葉遣いといい纏つている雰囲気といい、『いかにも』今時の女子だ、と一夏は思つた。

「もしもし? 聞こえます?」

「あ、ああ……聞こえてる。どういう用件だ?」

「いえ、特に用といつ用はござりませんわ。……ただ、他者を知る

うと思つのなら、まずは実際に話してみるのが一番でしょ？ あなたはそう思いませんか？」

同意を求められた一夏は、確かに、と肯定した。

それと同時に『口を恥じた。自分は第一印象で決めて掛かられるのを嫌がつてゐるといふのに、『他ならぬ自分が第一印象で決めて掛かつていた』といつて事実が自己嫌悪を呼び起こす。

「悪い。俺、第一印象であんたの事を決めて掛かつちまつてた」

だからこそ、一夏は頭を下げた。……目の前の人物には困りものだらうが、いふでもしないと自分のスジが通せない。

「ぐう……つ！ 彼もこんな気持ちだったのかしら……？」

いきなり頭を下げられた当の本人、セシリ亞・オルコットは困惑し、つい一時間ほど前に自分が頭を下げた相手もこんな感じだつたのだろうか、と思考した。……それが言葉として零れでいることに気付かぬままに。

「あ～もうー とにかく頭を上げてくださいな！ いきなり頭を下げられては、わたくしの方が困つてしまりますわ！」

ついセシリ亞は怒鳴つてしまつた。別に怒つてはいないのだが、こんなのは彼女にとつても予想外である。……どちらかと言えば直情徑行気味な彼女はイレギュラーに弱かつた。

「あ、その、悪い……」

「いえ、わたくしも怒鳴つてしましましたから……」

一夏が頭を上げたかと思えば、今度はセシリ亞が頭を下げる。

暫しの後、二人揃つて小さく笑う。

奇妙な静寂が教室内を包んだ。寧ろ、一人の周りに独特の空

気が形成された、と言つた方が正しかろう。

当然、そんな空氣を許容できない者がいた。

篠ノ之箇である。

彼女は一夏に恋をしている。そして、これ以上ないくらいの焼き餅焼きであった。ついでに言えば『素直になれない』病の持ち主で、加山曰く『ツンツンツンテレ』である。

箇は正当な 一夏にとつては不当である 怒りをぶつけようと席を立つた。そして一步田を踏み出すと同時にそれが鳴り響いた。三時間田の開始を告げるチャイムである。……ああ、無情。箇は怒りを抑え込んで席に着いた。

「IJの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する。が、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

三時間目。教壇に立つたのはこれまでと違い山田先生ではなく織斑千冬であり、その第一声がこれだった。

その言葉を聞き、総一は教師としての織斑千冬に疑問を抱いた。確かにクラス代表者を決めるのも必要だろうが、何も授業中に行なうことではない。それこそ下校時のHRで行えば済むことだ。

なるほど。確かに織斑千冬は優れたIJS操縦者なのだろう。……それは総一も認めるところだ。

しかし、それが優れた教育者といコールで結ばれるとは限らない。千冬の場合、その言動から鑑みるに軍隊の教官などであれば適正は抜群だろうが、教師としての適正は然程高くない。……総一はそう見て取った。

（織斑一夏への事前指導も行つていないようだし、IJIの上層部は一体何を考えているんだ……？）

「はい！ 織斑君を推薦します！」

「私は総一君を推薦します！」

（ん？ 今名前を呼ばれたようだが、一体何だ……？）

考え方沒頭していた総一は「」の名前を呼ばれたことで我に返り、情報を得ようと耳を立てた。

「では候補者は織斑一夏と大神総一。……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

代表者の選出か、と千冬の言葉を聞いて理解した。

代表者とはクラスの顔だ。それが周囲に埋没するようでは意味がない、と考えるのも道理ではある。そしてこのクラスには打つて付けの寄せパンダが一名存在しているとなれば、それが選ばれるのは自明の理だ。だが、クラスの顔というのならば専用機持ちで充分に事足りる、というのが総一の考え方である。

「では、俺はセシリ亞・オルコットさんを推薦します」

総一の言葉が、教室内に静かな波紋を呼び起こした。

「さて、それじゃあ帰ろうか、織斑君？」

放課後。唸る一夏にそう声を掛けたのは総一である。しかし、誘われた一夏としては意味がわからない。

「いや、帰るつてどこにだよ？ 俺は一週間は自宅通学なんだが？」  
「……それも聞いてないのかい？ 俺という一人目が現れた事で、部屋の問題は解決しているんだけど……」

首を傾げて問う一夏に、総一は深い溜息を吐いて答えた。  
当然、わからないのは一夏である。そんな話は聞いていない。

「はあ？ それって一体どういうことだよ？」

「そうだな……？ IIS学園は全寮制で、基本的に相部屋とされて

いる。……ここまではいいかい？」

「ああ。だから『男の俺を迂闊に放り込むわけにはいかない』ってんで、少なくとも一週間は自宅通学って聞いてたんだが？」

「そう、そこだ。君が男で、同室の子が女子だから問題となるんだ。だから時間を掛けて君用の部屋を用意しなければならなかつた。

けど、俺という一人目の男が現れた。……なら、俺と君を同室にしてしまえば問題はない。わざわざ時間を掛けて個室を用意する必要もない」

言われてみれば納得である。

しかし、一夏としてはこう言わずにほいられなかつた。

「なあ……俺つておぞなりにされてんのかな？」

「…………」

否定したくても否定できず、総一は沈黙を以て答えるしかなかつた。

総一の沈黙に、やつぱりそうなんだな、と一夏は首をガックリと落とした。

自宅通学する必要が無くなつたのは、まあありがたいといえばありがたい。しかし、荷物は家に置いてあるのだ。これでは一度手間である。

「ああ、織斑くん。まだ教室にいたんですね。よかつたです」

「山田先生……？ 一体どうしたんですか？ そんなに息を切らせて

呼ばれた声に一夏が振り向くと、そこには息を切らせた山田先生がいた。その手には何らかの書類を持っているのが見て取れた。

「えっとですね、連絡が遅れてしまつたんですが織斑くんの部屋が用意されています。当初の予定と違い大神くんと相部屋となつてしまつますが……。あ、こいつの紙が部屋番号で、これが部屋のキーになります」

「ああ、それについては今し方大神から聞かされたところです。キーと紙についてもありがたく受け取つておきます。……それで、用件はそれだけですか？　さつさと家に荷物を取りに行かなくちゃならないんですが？」

山田先生が言いつつ、紙とキーを渡してきた。それを受け取りつも、一夏の言葉は自然と荒くなつた。山田先生が悪いわけではないとわかつてはいるが、いつも後手後手に回されてしまつては感情を抑えきれなかつた。

「あう……それに関しては本当に申し訳ないです。それで荷物についてなんですが」

「私が手配をしておいてやつた。ありがたく思え。まあ、生活必需品だけだがな。着替えと携帯電話の充電器があれば問題ないだろつ」

山田先生の言葉を千冬の言葉が遮つた。

千冬のジャイアニズムに関しては諦めのついている一夏である。特に口答えする気も湧かなかつた。しかし、意外な人物が否を唱えた。

「織斑先生は黙つていてください！」

山田先生である。今日一日の態度が態度だつただけに、こつむビシッと言い放つとは思つてもみなかつた。……そう思つのは他の面々も同じだつたようである。一夏と総一のみならず、教室に残つていた他の生徒や千冬までもが驚きの表情を浮かべていた。

「もう、何なんですか、織斑先生！ 事前説明を行つてなければ事前指導も行つていな。挙げ句の果てには連絡の不徹底！ 確かに織斑くんは織斑先生の弟さんかもしだせんが、それでも限度というものがあります！ しかも、それに対してもう織斑くんに謝るでもなく上から田線のそのセリフ！ もつと言わせてもらえば生徒に対する口が悪すぎます！ ここは確かに特殊な学園ですが、それでも対外的には『高校』を謳つているんです！ 教育委員会から文句が来たらどうするんですか！ だいたいですね……」

その勢いは、正に一氣呵成と評するのが相応しかった。  
よく『普段大人しい奴ほど怒らせると怖い』と言われているが、目の前の光景はそれを証明しているようだった。

そしてその光景は、一夏にとつてひどく新鮮に映つた。何せあの織斑千冬がタジタジなのである。

「まあ、忙しそうだし……俺たちはお暇するところよ」「……そうだな」

これ以上この場にいても、一人に出来ることは何もない。

「それでは失礼します」

異口同音に言い放ち、総一と一夏は教室から去つていった。

校舎から寮までは五十メートルくらいしかない。色々と見て回るべき施設や設備はあるが、何も急ぐ必要はない、といつて両者の意見は合致した。

折り合えずは人心地つゝのが先決である。

おのぼりさんよろしくキヨロキヨロと周囲に視線をやりながらも、その足は真っ直ぐに自室への道を歩んでいる。

普通に歩くよりは時間が掛かったが、それでも必要以上に時間を取られることもなく一人は自室へ辿り着いた。

「改めて……これからよろしく、織斑君」

「ああ、よろしくな。それと、俺のことは名前の呼び捨てで構わないぜ。名字だと千冬姉と被るし、同じ年の奴から君付けで呼ばれるといこなばゆくて仕方ないからな」

「そうかい？ それじゃあ、次からは名前で呼ばせてもらひつとするよ。ああ、そいつ、俺のことは好きに呼んでくれて構わないから」

「えられた部屋へと着いた総一と一夏は改めて挨拶をした。

「んで、これからどうするよ、総一？」

「まずは……荷物の整理だな。俺は問題ないはずだけど、そつちはどうかわからないしな」

「……だな。千冬姉の言葉を信じるなら着替えと充電器しかないはずだし。場合によつては、購買にでも行つて足りない物を買ってこないとな」

指針を決め、二人はそれに荷物の整理を始めた。

しかし、千冬の言葉は真実だつたらしい。『一夏用』と書かれて部屋に置かれていたダンボールには本当に着替えと充電器しか入つておらず、整理という整理をする必要のない一夏はすぐに手持ち無沙汰になつた。

ならば、さつさと購買に行けばいいと自分でも思つものの、一夏の手はルームメイトに吸い付いて離れなかつた。

まず、総一は荷物から私服を引っ張り出すとすぐに着替え始めた。

……そこは問題ない。

しかし、なぜ制服の下から刀　　大きさからして『小太刀』とい  
う奴だろう　　が出てくるのか一夏には理解できなかつた。

それだけでは終わらない。着替え終わった総一がやけに細長い箱  
を丁寧に持ち運び、備え付けのテーブルに載せたと思つたら、中か  
ら出でてきたのはこれまた刀だつたのである。当然だが、制服から出  
てきた奴よりも長い。扱い慣れた様子で僅かに鞘から抜き放ち、軽  
く目を走らせた後で再び鞘に納めた。

一夏はそれを真剣だと断定した。以前に千冬から、軽くだが真剣  
についての手解きを受けたことがあるのだ。見間違いでも勘違いで  
もなく、あれは真剣だ。

「ん……？　どうかしたのか、一夏？」

「え？　あ、いや、その……」

じつと見ていることに気付いたのだろう。総一が一夏へと問い合わせ  
けた。　しかし、一夏は上手く返せない。

「なあ、それって……真剣、だよな？」

暫く口をモヤモヤさせた後、ようやくそれだけを口にした。

「ああ、そういう」とか……。いや、すまない。そうか、そういう  
えばそうだよな……」

一夏の言葉を聞き、総一は得心がいった様子で何度も頷いた。  
驚くのも当然だな、と呴いたのが一夏の耳に届いた。

「どこから説明すればいいかな？」

「いや、どこからつづれてもな。懇切丁寧に説明されても理解で

きないと思つから簡単に頼む

苦笑しつつ、了解、と言つて総一は説明を始めた。

それによると総一の実家は剣術『二天一流』を伝えているらしく、この年で総一は免許皆伝を受けているらしい。そして総一の所属するゴニット『BLOSSOM』のメンバーである真富寺桜華と加山雄輔もまた、それぞれに剣術を修めており、暇を見付けてはその二人と手合せをしていた。他のメンバーや事務所の人間もその事は知つており、ここ最近はつっこまれることもなかつたとのこと。仮につつこまれたところで、政府から帯刀許可を受けてるので何ら問題はない。

それを聞いた一夏は慣れ親しんだ諦観の念で以て受け入れた。そもそもISという兵器がスポーツとして扱われている御時世である。この年で免許皆伝を受けていようが帯刀許可を受けていようが、実際のところはそう問題ないのかもしれない。

「けど、剣術を修めてるのか……」

諦観の念で受け入れた一夏だが、その点については考えるところがあつた。

小学生のとき、一夏は剣を学んでいた。……それこそが筈との出会いに他ならない。

しかし、ISの登場とそれを開発したのが筈の姉、束であつたことが問題だった。幼い一夏はよく分からなかつたが、束が行方をくらまし、それにより筈は転校を余儀なくされた。

教えてくれる人物と、一緒に学ぶ仲間が揃つて離れてしまつたことにより、一夏はそこで剣を止めた。

だが、そんな一夏に転機が訪れた。

第一回IS世界大会『モンド・グロッソ』決勝戦当日のことだ。千冬が決勝戦に出ることもあり、一夏は当然の如く応援に行つた。

……そして、ISを使う数名からなるグループに誘拐された。

生身ではIS相手にどうすることも出来ず、恐怖に囚われたまま時間だけが過ぎていった。

十分か一時間か、それとももつとか、どれだけ時間が経ったかも分からぬ中、一夏はそれを見た。

騎士とも侍とも言える、桜色をした全身装甲のIS　　だと思つ、多分。

その手には一振りの刀を握り、そこから繰り出される剣技を以て相手を圧倒する姿。……一夏は今でもその時のことを見出せる。

そして、その姿に、その技に、織斑一夏は心の底から惚れ込んだ。千冬もまた決勝戦を放棄して駆けつけてくれたが、より心に残つたのは桜色のISの方だった。……これは、結果的に千冬の戦闘を一夏が直接見ることは無かつたためもある。

一夏は建物の中に閉じこめられており、桜色のISが建物内部の誘拐犯を、千冬が建物外部の誘拐犯を相手取つたのだが、それは全くの偶然によるものだつた。

その証拠に千冬にも桜色のISに心当たりはないらしく、その正体不明さが『正義の味方』みたいで、一夏の心に刻み込まれたのだ。それ以降、部活こそやつていらないものの一夏は再び剣を始めた。

しかし、桜色のISの動きを模倣したりしてみたものの、一人では素振りが精々。時折千冬が帰つてきても、その細腕で自分を養つてくれている姉のことを鑑みれば、稽古に付き合つてもうのも気が引けて頼めなかつた。

自分はどれ程の腕なのか、自分はあの剣にどれだけ近付けたのか、分からなかつたものが分かるかもしれない。

「頼む、総一。俺と剣を合わせてくれ！」

気が付けば、一夏はそう言つていた。

「準備運動はこれくらいで充分だな。……それじゃあ一夏、打つて  
こい」

翌日、早朝。

未だ陽が上がつて間もない時刻。寮の外に総一と一夏の姿があつた。

二人共に動きやすい服装で、両者の手には木刀が握られている。それを構え、総一は一夏へと打ち込んでくるように促した。

「いや、打つてこいつて言われてもよ……。防具も着けないで本当に大丈夫なのか？」

一方の一夏は気が進まない。剣を合わせてくられるように頼んだのは他ならぬ自分だが、防具も着けないのはいくら何でも危険すぎる。しかも竹刀じゃなくて木刀だ。

「構わないよ。ただ単に君の腕を見るだけだからな。……なら、防具など不要だ。重い防具が動きを阻害する点を加味すれば、寧ろ邪魔でしかない。そして、君と俺には未だ大きな開きがある。ハツキリ言わせてもらえれば、君の剣が俺に届くとは思えない」

淡々と総一は言い放つ。

今まで言われて黙つて居る一夏ではない。

（なるほど。確かに俺はお前より劣つているだらつた。けど、だからって、そこまでナメられてたまるかよ！ 絶対に一撃当てるやる！）

一 夏もまた木刀を構え

「 いくぜー 」

叫び、地を蹴った。

一 夏が攻撃し、総一が迎え撃つ。……それが何度も続いたり、静寂の中、木刀のぶつかる音だけが鳴り響く。

これで防がれたのは何度もだ。 荒い息を吐きながら一 夏は自問した。

分からぬ。 それが一 夏の答えだつた。

フェイントを掛けようが、力一杯打ち込もうが、総一はアッサリと防いでみせた。

また一合打ち合い、一 夏は大きく距離を取つた。 自分がこうも汗だくで息も絶え絶えだというのに、総一にそんな様子は見受けられない。

何でこうも違うんだ。 単純に腕の差だけだとは思えない。 しかも、アイツからは一度として打つてきてないんだぞ。 既に一 夏の怒りは治まつており、その心中には次から次へと疑問が浮かんでいた。

「 …… ここまでしよう。 このままだと、これ以上続けても意味はない 」

だからだろうか。 一 夏の耳には総一の言葉がやけに大きく響いた。

「 な…… ! ? 僕はまだやれるぞ、総一 ! 」

「 ああ。 確かにまだやれるだろう。 だが、それだけだ 」

一 夏は咄嗟に叫んだが、総一は淡々と返すのみ。

「……どうしたことだよ？」

「今回の打ち合い、君から言つてこなかつた場合は俺の方から誘つていた。……俺にも思惑があるからな。だが、実際には君の方から誘つてきた。……何故だ？ 何故君は俺に剣を合わせるようになつた？ 君は一体何がしたい？ 君が剣を振るつ理由はどこにある？」

それが分からぬ限りこれ以上続ける意味はない。……そう言つて総一は構えを解いた。

その言葉は、一夏に冷静さを取り戻させた。

冷静になつた一夏は、そのまま自己の内へと潜つていく。そもそも、自分は何で剣を合わせてくれるようになつた？ あの剣に、どうしようもなく惹かれた剣に、自分がどこまで近付いたのかを知るためだ。

では、何故自分はあの剣にここまで惹かれたんだ？ 助かつたと思つたから。嬉しかつたから。

本当にそれだけか？ 違う。『あの剣を身につければ、自分もまた誰かを護れるんじやないか』つて、そう思つたからだ。ならば、それを鑑みて今の自分はどうだ？ 酷く無様だ。この剣で、誰かを護ることなど出来るのか？ 出来ない。こんな理由を見失つた剣では、誰かを護るだなんて夢のまた夢だ。それに気付いたとして、どうすればいい？ 決まつている。

「心を静めろ」

いつしか一夏は、両の瞳を閉じていた。

「覚悟を決める」

そして自分に言い聞かせるように声を出す。

「誰かを護ること」と「誰かを傷付けること」

木刀をしつかりと握り直す。

「それを認めて、なおも『護る』と魂で叫べ

何度もとなく模倣した、その構えへと移行する。

( 護るー )

魂で叫ぶと同時に、一夏はその瞳を開いた。

( もうだ。それでいい……！ )

一夏の雰囲気が変わったのを、総一もまた当然の如く感じ取った。ピリピリと空気が振るえている。

先程までの一夏とは全く違う。

これは断じて見せかけだけの変化ではない。

「……………、理由を思い出したようだな。来い、一夏！ その剣、見事俺に届けてみせろ！」

一夏の気に昂揚した総一が叫ぶ。

答えるかのように一夏が駆けた。

それはさながら居合の如く。

一夏が抜き、総一が防いだ。しかし、一夏の動きは止まらない。

「おおおおおお…………！」

それは流れるような連續五連撃。只管に模倣していく中で、より自分が動きやすいように、それでいて威力が損なわれないように改良を続けた結果に至った、言うなれば織斑一夏の独自オリジナル剣技。

並大抵の者であれば、遮一無一躲そうとすれば躲せるだろう。しかし、防ごうとすればまず間違いなく防ぎきれずに敗れる。……今回一夏が放つたのはそんな連撃だった。

だがしかし、今現在一夏と相対しているのは総一だ。剣を振つてきた回数も歳月も、一夏を軽く凌駕している。

それだけに留まらず、総一は暇さえあれば他者と打ち合つてきたのだ。その結果鍛えられた見切りは、既に一線級の域に達している。故に、総一が一夏の剣を防ぎきるのは道理である。

「な……！？」

通常ならば。

高い見切りを有しているからこそ、総一は困惑することとなつた。一夏の剣によく見知った流れが見えたからである。幼い頃から数えるのもバカらしいほどに打ち合い、互いに切磋琢磨しあつてきた真宮桜華の剣が見えたのである。

桜華の剣を、総一は我が事のように理解している。だからこそ、次はどこへどのようにして打ち込んでくるのかも理解できる。それこそ、反射的に剣を合わせてしまうほどだ。

しかし、今現在総一に剣を向けているのは織斑一夏だ。……真宮寺桜華ではない。

結果、総一は二つの理由から反射行動を無理矢理に抑えつけた。

一つに、桜華に合わせた剣では一夏の剣は防げないため。

一つに、桜華に合わせた剣では一夏が防げないため。

幸いだつたのは、今回総一が守勢に回つていたことであろう。もし攻勢に出ていたならば、最悪、死体が一つ出来上がつていた。

一夏の剣。桜華の影。意識と無意識の相反する命令。……様々な要因が重なり、総一は体勢を崩された。

しかし地力の差か。体勢を崩されてなお、総一は一夏の連撃を防ぎきった。

「届かなかつた……か」

結果を認め、一夏は俯いた。遠い。総一にはまだ届かない。

「いや……」

しかし、連撃を防ぎきった時の本人が、一夏の言葉を否定した。

「え……？」

その言葉に疑問を覚え顔を上げた一夏の前で、総一の木刀が中程から折れて地に落ちた。

「ありがとうございます、一夏。君のおかげで、俺はまた強くなれる」

慢心はしていないつもりだった。過信もしていないつもりだった。しかし、どこかで油断はしていたのだろう。

今回は反射行動を無理矢理に抑えることが出来た。だが、仮に次があつたとするなら、その時も抑えられるかどうかは分かったものじゃない。……今回ることは、運が良かつたのだ。

それを知つたからこそ、また一つ強くなれる。

そしてだからこそ、それを発覚させてくれた一夏への感謝は死きない。

「そしておめでとう、一夏。君の剣は、確かに俺に届いた」

その顔に笑みを浮かべ、総一は自らの敗北を一夏くと告げた。

「へえ、セシリアって箸の使い方上手いじゃん」

一年生寮の食堂にて、セシリアの箸裁きを見た一夏は感嘆した。彼的に外国人は箸を上手く使えないイメージを持っていたのだ。ちなみに今は朝食時である。総一、一夏、篠、セシリアの四人が同じテーブルに着いていた。

何故この四人が同じテーブルに着いているのかといえば、そんなに難しい話ではない。

まず、総一と一夏の二人は剣を合わせた後、汗を流してサッパリしてから食堂へと向かった。

その道中、同じく食堂へ向かう篠と遭遇し、一夏が彼女を誘った。篠が一夏の誘いを承諾し、三人揃って食堂へ来たのだが、生憎と席の殆どが埋まっていた。

そこで席を探す彼らに声を掛けてきたのがセシリアというわけである。

総一、一夏、セシリアの三人は今度の月曜に勝負することになっている。しかし、その空気は特に険悪というわけでもなかつた。言葉数こそ少ないものの、どちらかと言えば穏やかだ。

ちなみに今朝はバイキングである。……が、それでも敢えて選んだ食事に名前を付けるとするならば、一夏と篠が和風セット、総一が野菜炒め定食、セシリアがお刺身定食といったところか。

そんな中、ふとセシリアを見た一夏が先の一言を漏らしたのだ。

「…………叩き込まれましたから」

一夏の感想にすぐには答えず、ゆっくりと咀嚼し嚥下してから、セシリ亞はただそれだけを口にした。

ボソリと呟げられたその一言には、並々ならぬ感情が込められていた。

「ここまで扱えるようになるの?」、相當苦労したのだろう。

者にそう思わせるほどであった。

「そ、そつか……」

「ええ。それより、時間はあまりあつませんわよ。そのペースで間に合つのかしら?」

セシリアに言われ、一夏は現在時刻を確認した。

確かにあまり余裕がない。が、間に合わないわけでもない。

「まあ、ギリギリ間に合つだろ」

言つて、一夏は黙々と箸を動かす。

その速度は速すぎず遅すぎず。しっかりと咀嚼しているのが見て取れた。

「しかし、叩き込まれたって誰にだい?」

今度は総一が問い合わせた。既に食器は空となつており、あとはお茶を飲み干すだけという状態だ。

「名前は北大路神楽。<sup>かぐら</sup>リーヴァ リヴァイアス・ブルーメールと共にわたくしの数少ない親友ですわ」

誇るかのようにセシリアは答えた。

「ほう? そなたには日本人の親友がいるのか?」

驚く筈に答えたのは

「いや、北大路家は既に帰化している、フランスにその名を馳せる名門貴族の一柱だ。古くより、同じくフランスの名門貴族であるブルーメール家との親交が厚く、現時点において神楽はブルーメールの次期当主であるリヴィア・アイアスと婚約関係にある。また、北大路の女はその家訓により代々『大和撫子たらん』とする姿勢を学ぶ。神楽自身、既に日本では見かけなくなつて久しい、数少ない現存する『大和撫子』だ。『書』、『花』、『お茶』は勿論のことだが、それより何よりその『射』が見事だ。あれは一度見たら忘れられない」

しかしセシリアではなく総一だつた。しかも、その説明は内部事情にまで及んでいる。……もつとも、当の総一とて『北大路神楽』という名前だけでは判断がつかなかつた。『リーヴァ』といふ名前が絡んできたからこそ分かつたのだ。

それに驚いたのは他ならぬセシリアだ。

「大神さん、あなた……何者ですか？」

セシリアがそう問い合わせるのも無理はない。

北大路家もブルーメール家も名門の貴族なのだ。一般人がそう簡単に親交を持てるはずがない。いや、仮に親交を持てたとしても、内部事情まで明かされるとは考えられない。

「何者と訊かれても大神総一としか答えようがない。ま、太正の頃を境に大神家は結構手広くコネを持つようになつてな。有名どころで言えば……シャトーブリアン、ライラック、レゾン、ソレッタ、ホワード、アルタイル、神崎、花小路とかとも親交がある」

指折り数えながら名を挙げていく総一にセシリアは言葉もない。

……見れば、一夏と簫も絶句している。

「外国のことはよく分からぬが、神崎とは『神崎重工』のことか？」  
「それに花小路つてまさか『日本の政財界の重鎮』つて言われてる  
あの花小路か？」

簫と一夏の問い合わせに総一は軽い調子で頷いた。

知らない名前も勿論あるが、知っている名前は『知らない方がおかしい』というレベルである。……そこから考えれば、知らない名前も地元に行けば『知らない方がおかしい』レベルにあるのは間違いないだろう。

そんな名前を総一はポンポンと挙げていったのである。

「あ、頭が痛くなつてきましたわ……」

この瞬間、一夏、簫、セシリ亞の中で『大神総一』=得体の知れない人物として認められたのだった。

ともあれ。

得体が知れなかろうと頭が痛くなろうと、時間は刻一刻と過ぎていくのが理である。そしてこのままでは遅刻確定だ。  
「ごちそうさまでした、と四人の声が重なつたのはある意味で必然だった。

「しかし、行動が遅いにも程がある。やれやれ……としか言ひようがない。君も災難だな、一夏」

時間が進んで昼休みである。朝食時と同じく、総一、一夏、簫、セシリ亞の四人が、またも同じテーブルに着いていた。

そんな中、お茶を飲んで一息ついた総一がおもむろに言い放つた。  
……だが、いきなりそんなことを言われても一夏には訳が分からな  
い。

「災難だなつて……何がだ?」

田をパチクリとさせながら、一夏は総一へと問い合わせ返した。

「恐らくは専用機のことでしょう」

「言つて、違いますか、とセシリ亞は田で総一へと問う。  
総一もまた、違いない、と田で返す。

「まあ、確かにな……。世間一般におけるお前の立ち位置を考えれば、専用機が『えられるのは至極当然と言えるだろ?』……だとうのに、未だ用意されていない。しかもだ一夏。お前がここに来る」とを強制されたのはいつだ? それから何日経つてこる?」

幕もまたお茶を一口飲んでから同意した。

そこまで言われば、流石に一夏も理解できる。

「けど、だからこそ手間取つたって事じゃないか? 専用機つてのは基本的に國家や企業に属する人間にしか与えられないんだろ?  
そこに例外を作るわけなんだから、意見の対立とかもあつたんじゃねえの?」

一夏の意見も尤もだ。確かに意見の対立もあつただらつ。  
だが、しかしだ。

「俺が専用機を『えられてから軽く1週間以上は経つて』いるわけだ

が……』の事実を踏まえてもそつと言えるか?』

一夏に専用機が与えられるのは既に決定されていたことだ、と総一は言外に言つてのけた。

何せ総一の立ち位置は『一一番田の男』である。悪く言えば予備でしかない。

そんな総一が既に専用機を持っているのであれば、一夏もまた既に専用機を持つていなければおかしいのである。無論、これは『政府直属機関である華撃団の一員』といつ総一本來の立ち位置も絡んでいるわけなのだが……。

「大神さんのが既に専用機を持っているのがいつかによつても変わつてきますが……仮に、用意されるのに時間のズレが発生したとしても、それは『多少』と言える程度のズレでしかないはずですわ。掛かつたとしても、精々が一日一日といふところでしょう。まあ、大神さんを比較対象にするのもおかしいのかもしれませんが……」

そんなことを言つて、セシリアはジトリとした目で総一へと視線を送る。確かに、と頷きながら一夏と幕もジト目で総一を見やつた。なにせ今朝の驚愕は未だ記憶に新しい。……『』の男なら、と三人が思つてしまふのも無理はなかつた。

そんな時だ。

「ヒュー、ヒュー、聞きましたよ総一君。何でも今度の月曜にIISで勝負するらしいじゃないですか? 確かイギリスの代表候補生と例の男の子とのバトルロイヤルでしたつけ? 流石『黒髪の貴公子』は入学早々やることが違いますねえ~」

まるで総一を助けるかのように、横合からそんな声が掛けられた。

向き直る一同の眼に映つたのは人好きする笑顔を浮かべた女性である。美人と言つても差し支えはないだらう。年齢は二十歳を超えたあたりか。身に着けているエプロンからエス学園のスタッフであることが分かる。

その姿に驚いたのは総一である。　聞いてない。彼女がここにいるなんてこれっぽっちも聞いてない。

「なあ総一？　この美人さんお前の知り合いか？　ついでに『黒髪の貴公子』って何だよ？」

総一を肘で突きつつ訊く一夏。……しかし、当の総一は驚愕の表情で固まつており、答えられる状態はない。

「やだもう、美人なんて照れるじゃないですかあ。ま、それはともかく……私のことが気になるみたいね少年？　問われたならば、答えてあげるが世の情け。答えられる範囲でお答えしましよう！　あ、そっちの娘たちも質問があつたらどうぞ？　と言つことでまず名前はカグヤ・カプリス。お察しの通り、総一君の知り合いで、より正確に言つならば……愛人？　で、『黒髪の貴公子』つてのは歐州における総一君の通り名ね。同名映画の主演をやつしたことによ来します。ま、上映 자체はまだだけど、前評判だけでかなりのものよ？」

一夏の言葉が聞こえたのだろう。当の女性本人が答えてきた。その表情はコロコロと変わり、アクションの変化も激しい。……正しく天真爛漫といつ言葉が似合つだらう。

「愛人だと！？」

「わたくしのことは説明無しですね……。わたくしだって『蒼の公女』ですのに……」

聞き捨てならない言葉に叫ぶ篠。共演し、ヒロインを演じたにも関わらず、自身のことが何も説明されずに落ち込むセシリ亞。……始めのシリアスはどこへやら。場は一気に混沌カオスの様相を呈すこととなつた。

「……って、誰が愛人ですか誰が！　人聞きの悪いことを言わないで下さいよ、カグヤさん！」

「そんなっ！？　酷いわ総一君……。あの日、同じベッドで一人朝まで過ごしたことは無かつたことにするとこうの…」

「おい、総一！　こんな美人さんを泣かせてんじゃねえよ！　男なら、言い訳せずに責任を取れよ…」

驚愕から覚め、カグヤの言葉につつこむ総一。皿の端に涙を浮かべ、よよよ、と芝居がかつた動作でくすおれるカグヤ。見事に騙され、総一に対して怒鳴る一夏。　未だ混沌は終わらない。

「そんな簡単に騙されないでくれ、一夏……。ああ、何だか頭が痛くなつてきた……。まあそれはともかく、カグヤさん？　俺はただ、敢えて誤解されるような言い回しをするのを止めて下さいと言つてるんですよ。『同じベッドで二人朝まで』を否定はしませんが、それだつて俺が十にも満たない頃のことで、更に言えば、甘酒呑んで酔つぱらつたあなたが俺を無理矢理引っ張り込んだんじゃないですか……。はね除けるにはね除けられなかつた俺の苦痛をそんな風に弄るんだつたら……俺にも考えがありますよ？　フ、フフ、フフフフ……」

頭を抑え、深い溜息をつき、諭すように言つた総一は、最後に壊れたように睡つた。

血統かどうか分からぬが、大神に連なる男子は基本的に女難で

ある。総一と星司も例外なく女難の気が強い。

それに関して、端からは『リア充』だのなんだの言われており、実際に女性との間で起こっていることなので総一と星司もそれを認めてはいる。 だが、振り回されることが多い以上、どうしても女難として捉えてしまうのだ。

それでも『日本男児たる者、かくあるべし』と育てられた二人は、基本的に女性を尊重する傾向が強い。 しかし、それにも限度が存在するのである。

抑圧された感情はいずれ爆発するのが理だ。 そして、総一がこのように嗤うのは、その導火線に火がついたことを意味していた。以前総一を怒らせたときにどうなったのか。それをカグヤは情報として知っていた。

(マズ……ッ！ 無理すぎちゃった……！)

故に焦る。

情報が真実かどうか興味がないわけではない。 正直に言えば確かめたい。 しかし今は状況が悪い。

仮に情報が真実正しかった場合、ここで総一を怒らせるということは、周りで昼食を食べているだけの、何の罪もない生徒たちを巻き込んでしまうということだ。 …… それはカグヤの望むことではない。

ならばどうするか。 考えるまでもなく答えが一つしかないことをカグヤは理解していた。

他の相手ならば分からないが、こと大神総一が相手である以上、解決方法は誠心誠意謝るしかない。

「ゴメンなさい、総一君。 私が悪かつたです。 この通りです。 …… 機嫌直してくれませんか？ お友達も困惑しますよ？」

見事に頭を下げられた上でチラリと上目遣いに見つめられては、総一としても怒りを抑えるしかなかつた。だが、ただ謝罪を受け入れるだけでは、また弄られる可能性が高い。……と言つより、まず間違いなく弄られる。ことカグヤ・カプリスが相手である以上、この予測は絶対と言つていいだろう。

「はあ……分かりました。ただし！ 僕たち四人にカグヤさん手製のデザートを奢ってくれるのが条件です。……これでどうですか？」

怒りを呑み込んだ総一は条件付きで謝罪を受け入れた。

ことお菓子作りにおけるカグヤの実力は確かである。些か軽い条件な気がしなくもないが、この条件ならばまた弄られたとしてもカグヤの手作り菓子が味わえるので溜飲は下げるだろう。

「りょうか～い……って言いたいところなんだけど、流石に今から作るとなれば時間も掛かるし出来合いのものでもかまわないかなあ？ 別に今すぐじゃなくていいって言つんなら時間合わせて作るけど？」

「俺は出来合いのもので構いませんよ。放課後限定だけど今日からまた仕事が入つてるので時間を合わせるのも大変ですしね」

一夏、篠、セシリ亞の三人も出来合いのもので構わないと答えた。三人とも、これは降つて湧いた幸運であり高望みするべきではない、と考えたためである。

「それで、仕事つて何すんだ？ 休日はともかく、基本的に敷地外へ出るのは禁止だろ？」

ちょっと待つてね、と小走りに駆けていったカグヤを見送り、一夏は総一へ訊ねる。……これは一夏が芸能方面に明るくないこともあるが、純粋な興味から出たセリフであった。

「ん？」写真撮影。流石に仕事でも敷地外へは出られないから敷地内の撮影になるけどな。……これは聞いた話なんだが、仕事の話を持ちかけたらこここの経営陣は一つ返事で頷いたらしい。まあ自慢じゃないが、俺の人気もかなりのものだからな。『撮影協力』ってことで振り込まれる金額を考えたら、まず間違いなく頷くだろ？」

至極当然といった様子で総一は答える。

「そんなわけで、仕事後自室に帰つてからはともかく、その前に時間を取りことは難しい。それを踏まえた上でだが……一夏、お前はこれから勝負当面までの放課後、俺の仕事中はただ只管に剣を振れ。自分の身体の動かし方さえ分かつていれば、あとはEISの方で合わせてくれる。そこに理論は必要ない。『イグニッシュョン・ブースト瞬時加速』を例に挙げると、攻撃の過程にそれが必然として組み込まれているのならば出そうと思わずともEISの方で発動してくれる、といった具合だ」

そこまで言つたところで、総一はひとまず言葉を切つた。そして、聞き手たる一夏が言葉の意味を理解するのを待つ。

「言いたいことはわかつたけどよ、だからって理論を学ぶ必要が無いつてわけじゃないんだろ？」

「当然だ。理論は俺の仕事が終わつた後で教えるわ。だけどお前の場合、肝心の機体が手元にないだろ？ それでどこまで理解できるか判断が付かないんだ。……ほら、よく『体育会系』とか『文化系』とか言うじゃないか？ それと同じだよ。『文武両道』のヤツもいるが、大抵の場合はどちらかに偏つてゐるからな……。けどま

あ、見た感じお前は体育会系だと思うから剣を振ることを勧めてるのさ。実際に誰かと打ち合つなり想像上の相手と打ち合つなりやり方は任せるけど、ただ闇雲に振るだけじゃ無意味だからな？ 相手の動きに自分はどう合わせるか、自分の動きに相手はどう返していくか、ありとあらゆる状況を模索して振るんだ。それが集中力の増加にも繋がるし、視野の拡大にも繋がっていく。……ただ、これは諸刃の剣でもあることを言っておく。こういつ事をしていた場合、本質が兵器であることも相俟つて I.S を道具として見かねないんだ。確かにそれも間違いやないが、今日の授業で教わったように I.S は『意識』と呼んで差し支えないものを持っている。つまりは純然な道具じやない。相棒なんだ。I.S を動かす際にはそのことを忘れるなよ？』

総一がこう言つたのには根拠がある。

そして、その根拠こそが靈子甲冑だ。

靈子甲冑の起動には強い靈力を必要とするが、実のところそれだけではスマーズに動かない。何故なら、靈力とは言わば『精神エネルギー』であり力タチを持たないからである。

故に、靈子甲冑には操縦者の負担を軽減させるために、この『力タチのない力』を『物理エネルギー』に変換する機関が組み込まれている。それを『靈子力エンジン』という。

この靈子力エンジンを形成する大きな要素が『靈子水晶』と『靈子反応基盤』 別名『靈力反応基盤』 である。

靈子甲冑の起動は三つの段階に分けられる。

第一に、操縦者の靈力を靈子水晶が物理エネルギーである『靈子力』に変換、増幅する。

第一に、靈子反応基盤によって靈子力を安定化させる。

第三に、この安定化した靈子力を靈子力エンジンが受け取つてるのである。

この一連の流れを『靈子力循環システム』と称している。……も

し操縦者の靈力だけで靈子甲冑を動かそうとすれば、この一連の流れを操縦者だけで行わなければならず、相当の潜在能力が求められると同時に多大な負担が掛かってしまうのだ。

さて、靈子力循環システムの中で問題となるのが靈子水晶と靈子反応基盤である。

まず靈子水晶だが、文字通りに水晶なのである。これは偶然から発見されたものであり、その特性もあって数が少ない。人工的にも精製できるのだが、その効果は天然物には遠く及ばないのが実状である。

次に靈子反応基盤だ。一定以上の靈力がないと反応せず、靈子水晶が変換、増幅した靈子力を安定域まで持つていけないのだ。安定域まで持つていけないということは靈子力エンジンが起動しないということであり、つまりは靈子甲冑が起動しないということである。……靈子甲冑の起動には強い靈力が必要、というのはここから来ているのだ。

それだけでも問題なのに、これらは独特の『波長』を持っているのだ。これには諸説あり、靈子水晶が持つているという説もあれば、靈子反応基盤が持つているという説もある。

そして、この波長を『心』と言い換えることもあり、これを重ね合わせなければ靈子甲冑は本来の力を發揮しないのである。

これこそが、総一の語った根拠である。

確かに靈子甲冑とISは別物だ。その設計思想も設計理念も異なっている。……だが、それでいて似ている部分が多いのだ。

現に、それを証明するかのような事も起こっている。……ISに初めて触れたときには自分を見つめる存在を、靈子甲冑に初めて触れたときには自分に呼び掛ける声を、総一は感じたのだ。

それこそがISと靈子甲冑の似て非なる部分であろう。『心』と『意識』、『声』と『視線』……確かに違うものである。そして同時に、純然たる道具には必要がない、という点で共通しているのだ。

「……なるほど」

総一の言葉にも一理ある、と一夏は思った。 全面的に正しいとは思わないが、それでも自分の場合として捉えるならば理に適っている。第一、あのサッパリわからない授業のことを鑑みれば、理論を学んだとひで理解できるとは思えない。……ああ。確かに自分は体育会系だ。

「……そうだな。他の奴はどうか分からぬけど、俺の場合はお前の言葉通りにするのが一番だと思つ」

瞑目し、考えを纏めた一夏は頷いた。

「第一、放課後、時間は取れるか?」

「あ、ああ……。問題ない」

一夏の言葉に篝は頷いた。

昨日話したときには見えなかつた真つ直ぐさが、炎が、今の一夏には見える。

これでこそだ、と篝は思つた。

「……なるほど。織斑さんもまたサムライだったということですか……。フフ、大神さんにわたくしの舞を刻み込むことが出来ればそれでいいと思つていまつたが……考へが変わりました。織斑さん? あなたにも私の舞と名前を刻み込んで差し上げます。 ですから、その返礼としてあなたもまた、あなたの武と名前を私に刻みつけてくださいませ」

微笑を浮かべ、セシリ亞が言つた。

それは宣戦布告にして挑発だ。

バトルロイヤルをする事になったとはいえ、セシリアの目に敵として映つてゐるのは総一だけであり、一夏は添え物でしかなかつた。……それが、つい先刻までの嘘偽り無いセシリアの本音だ。

しかし一夏の言葉が、その身から発せられる気迫が、セシリアの考えを覆した。一夏もまた自分の敵として捉えるに相応しい相手である……と。

そして、敵には全力でぶつかるのが礼儀だ。  
だからこそ宣戦布告。

同時に、自分の見立てが間違つていかない証明が欲しい。

それ故の挑発。

「ああ、見せてやるよ。未熟なことこの上ないが、それでも今の俺に出来る最高の剣をな……！」

「今度の勝負はあくまで試合トーナメントであつて死合デュエルじゃない。……なら、精一杯楽しんだ方が得策か。よし、期待に添えるかどうかは分からないが、俺の剣も披露させてもらつとしよう。」

「わたくしは剣を学んでいないので心苦しい気がしなくもないのですが、この国では『舞は武に通ず』という言葉があると聞き及んでおります。……ですから、わたくしは舞を披露させていただきますわ。どうか心ゆくまで楽しんでくださいませ」

三者の視線が交わり、見えない火花が宙に散る。  
しかしそれも一瞬のこと。

「はい、お待たせ~」

届けられたデザートを前にしては、そんなことを続けたといひで何の意味もなさない。

「まあそれはそれとして……」

「今はこれを片付けるのが先決」

「……だな」

「いただきます」

口々に言い、一同はカグヤの手作り菓子を頬張った。

「……今、なんて言った？」

総一がIS学園に入学したその翌日のことである。夜遅く 深夜といつても差し支えない時刻に掛かってきた総一からの電話。その内容を聞いた桜華は普通に問い合わせ返した。

「だから、織斑一夏に剣を教えたこともあるのか？」

「どうやら聞き間違いではなかつたらしい。 桜華は思わず溜息を吐いた。

「ああ、いや、言い換えよう。そもそも、織斑一夏とは一体誰だ？」

桜華の世界は非常に狭い。総一や加山を始めとした一部の例外を除き、一切の興味を持たないのだ。

有ろうが無からうがどうでもいい。 いてもいなくとも構わない。それらの有無で桜華の世界に影響など出ないのだから……。

仕事上接する必要のある相手であつても、桜華にとつては記号でしかない。だからこそ、そんなモノに好意を抱くこともなければ嫌悪を抱くこともない。ただ与えられた仕事、言われたことを淡々とこなすだけだ。……それはさながら機械の如く。

しかし、だからこそ桜華の評価は高かつた。何故なら、桜華の行動は確かに機械のそれであるが、眞実機械ではない。感情も持つていれば、その表し方も分かつている人間なのだ。

喜び、哀しみ、怒りといった感情を、桜華は求められたとおりに表すことが出来る。……周囲に無関心だからこそ、逆に素直に表すことができるのだ。……それが真宮寺桜華という人物である。

そしてそれ故に、桜華がまともに認識していくことなど数少ないのが実状だった。

たとえ『織斑一夏』が世界で一躍有名にならうとも、そんなのは桜華にとつてどうでもいいことなのである。

「ああ。 そうだな。 お前はそういうヤツだった。 ……織斑一夏は護衛対象だ」

「……なるほどな」

言われてみれば、そんな名前だったような気がしなくもない。多分に呆れを含んだ総一の言葉に、記憶を整理しつつ桜華は頷いた。

「それで？ どういつた経緯で私がそいつに剣を教えたなんて素つ頓狂な話が出てきたんだ？」

桜華が問い合わせ返すのも至極当然である。

桜華はその無関心さも相俟つて、自発的に動くことが少ない。それでも、自分の世界に関わることなら寧ろ積極的に動くし、請われた場合も素直に聞くだらう。

前者の場合ならまず忘れるなどないし、後者の場合でも事実の有無くらいは覚えている。

しかし、今回の総一の話はどうやらにも該当しないのだ。

「そうか……。いや、実は今日の朝、彼と剣を合わせたんだ。 ……最初の内はそうでもなかつた。軽い挑発に乗つて乱れるほどに、彼の剣は軽かつた。暫く打ち合つてもう充分かと思つた。それでも『もしかして』という思いが拭えなかつたから理由を思い出すように促してみたんだ。 ……そしたらまあ、激変したよ。まさしく雲泥の差だつた。思いがけず昂揚したよ。 ……しかし、本当に驚いたのは

その後だ。彼の剣によく見知った流れが見えたんだからな……。  
うだ。桜華、お前の剣だよ

いや、あの時は本当に焦ったよ。 そう言って総一は言葉を切った。

そう言われば、桜華としても興味を惹かれる。……なにせ、他の誰でもなく大神総一が断言しているのだ。

「 そ い つ の 顔 [ 写 真 と か は あ る の か ? ]

「俺は持つてないな。それに時間も時間だ。これから写メを撮つて送るにしても、鮮明とは言い難いものになるだろっからな……。寧ろ加山に頼んだ方が確実だと思うぞ?」

「…………モジガ からか に 薙 て は な じ て が 」

「気にするな。私としてもお前の話は興味深かつたからな……。お休み」

電話を切り、桜華は横になる。……その顔は知らずの内に笑みを浮かべていた。

「待たせたな、桜華。……これが、今朝方頼まれた織斑一夏に関する資料だ」

「すまん。手間を掛けさせた」

お昼のことである。所属事務所『浪漫の嵐』の食堂にて昼食を取つていた桜華の前に、いくつかの封筒を持った加山が現れた。見れば、封筒にはそれぞれ名前が書いており、どうやら本人だけでなく、その関係者の資料も持ってきたようである。

これは素直にありがたかった。一方からでは分からぬことも、多方向から見ることで分かることがあるのは確かな事実である。

加山の配慮に、桜華は素直に礼を告げた。

「いいつてことよ。……だが正直な話、一体どうしたんだ？ こう言つちやあ何だが、お前が他人に興味を示すなんて相当だらう？」  
「昨夜、総一から電話があつてな……。その時に言つていたんだが、そいつの剣に私の剣が見えたらしい。しかし、生憎とこちらには覚えがない。だが、他ならぬ総一が言つてるんだ。……気のせいと聞き流すには、些か問題があるだろ？」「むう……。そいつあ確かに……」

加山が唸るのを眺めながら、桜華はおもむろに封筒の中から資料を取り出す。

「ああ。ちよい待つた。一応、機密書類も入つてるんでな……。ここで取り出されると問題がある。部屋に帰つた後にでもゆっくりと調べてくれ」

取り出そうとした。

「ふむ。確かに」

加山の言つてることは尤もである。これはあくまで華撃団の有する資料だ。また、いかに『浪漫の嵐』がその隠れ蓑であつたとしても、当然ながら関係者ばかりで運営されているわけではない。華撃団には関わりのない、その存在すら知らぬ一般人も務めているのだ。

そしてここは食堂である。一般人の目といつならば、ここほど触れそうな場所もない。

「では、私は部屋に戻る。何か思い出したら連絡するよ」

「おひ。……つてもまあ、気のせいですめばそれが一番楽なんだがな」

「違いない」

資料を脇に抱え、食器を返却口に戻して、桜華は自室へと向かう。  
……その足取りは、存外軽いものだつた。

「こいつが織斑一夏……か。確かに見覚えがあるよつた気もするが、これだけだとな……」

部屋に戻った桜華は、早速資料を取りだした。そして、まずは添付された写真に目を向ける。……しかし、その結果は芳しいものではなかつた。

まあ、それも当然である。桜華が気に留めていなかつただけで、織斑一夏の姿はニュースや新聞を始めとした様々な媒体で流れたのだ。……視界に映る回数が多ければ、その分だけ記憶に留まるのも必然である。

写真から記憶を洗うのには見切りをつけ、桜華は記された情報に目を通す。

出身、経歴、家族関係、交友関係……一通り読み進めてみたものの、やはり記憶に引っ掛かるものはない。

しかし、備考欄に気になる一文を桜華は見付けた。

何でも『一年前のある時期を境に、公園などで素振りをする一夏の姿が度々見かけられるようになった』らしい。……ここがポイントだつう。それまでと異なる行動を取り始めたということは、その『ある時期』に何かがあったことを示している。

華撃団で用いる資料形式の場合、備考欄には噂から何から取り留めのないことも記載するのが通例だ。文字通りの備考であって、その信憑性はハツキリと言えばアテにならない。

だが、今回ばかりは別だらう。少なくとも『剣』という部分で総一の言葉と合致する。

「チツ……」

桜華は思わず舌打ちする。……幾つかのキーワードは見つかったが、肝心の部分が分からぬのだ。

「仕方ない、と言えば仕方ないのかもしれんが……」

深呼吸をして幾らか気分を落ち着けた後、桜華は呟いた。そして思考する。

なにせ織斑一夏は極々普通の一般人だつたのだ。……自然、これら情報の大半は一躍有名になつてから搔き集めだらうことを意味している。いくら姉や交友関係者がある名人だとて、当時の織斑一夏本人はその限りではないのだ。それでも、有名人の関係者だからこそこの短時間でここまで情報が集まつているのだろう。……また、この備考欄に書いてあることからして、そもそも転載の可能性が高い。いくら何でも、今から一年前の噂を集めるなど不可能に近いからだ。

「そうか、転載か……！」

思考を重ねた末その可能性に思い至つた桜華は、すぐさま別の資料に目を通す。

果たして、姉である織斑千冬の資料にも気になる情報を見付けた。

「第一回 I.S 世界大会『モンド・グロッソ』決勝戦を突然辞退。その後、ドイツ軍で教官を務める……か」

突然の辞退だけならば、考えられる可能性は様々にある。……しかし、誰もが辞退の理由を知らず、それでいて唐突にドイツ軍で教官を務めるとあらば、『何かあった』と声高に叫んでいるようなものだ。

そして、桜華は『モンド・グロッソ』の時期と、ある事件の時期が重なつていることに思い至つた。

「加山か！ 二年前、私が遭遇した『騎士団<sup>ナイツ</sup>』に関する資料を持ってきてくれ！ 時期は I.S の『モンド・グロッソ』辺りだ！ もしかしたらもしかするぞ……！」

すぐさま加山に連絡を入れる。

「……！？ 了解した！」

桜華の勢いに呑まれたのか、電話に出た加山は最初こそ絶句していた。しかし、すぐさまその意味に気付いたのだろう。それだけを言って通話を切つた。

それから暫し。桜華の部屋のドアがノックされた。

「入つてくれ」

「失礼する。……すまない。思いの外時間が掛かつた」

入室するなり謝罪してきた加山に対し、気にするな、と桜華は座るよう促した。……確かに時間は掛かつたが、それでも突然の要請に対するものとしては充分に早い。

桜華は加山の持ってきた資料を受け取るも、それすぐには取り

出さない。

それに田を通すよりも先に、そうなるに至った経緯を説明するべき、と考えたためである。

すぐに確認したい気持ちも確かにあるが、飛躍しすぎている可能性も否めないのだ。

それならば、加山にも意見を伺つた方が良い。『隠密・諜報部隊』である『月組』の隊長を務めていることもあって、加山は情報の扱いに慎重だ。

「私が気に掛かったのは……」「……だ」

桜華の指した部分に加山は田を向ける。

「これは……。すまない。もう少し待つていてくれ。俺も思い出したことがある」

言つなり、加山は退室した。……それを怪訝に思いながらも、桜華には待つことしかできない。

そして、再度ドアがノックされる。

促せば、また別の資料を持った加山が入ってきた。

「それは？」

「『森羅』に関する資料だ」

桜華の問いに重々しく加山が答える。

「おこおこ……。まさか『騎士団』だけじゃなく『森羅』まで関わつてゐるって言つのか？」

頭を抑えて桜華が呻く。

世界規模で活動している秘密結社。……それが『騎士団』と『森羅』である。

その目的が一切不明なこと、そして隠匿性が非常に高い点で両者は共通していた。……しかし、両者は別に仲間というわけではなく、時に協力し時に敵対している関係だ。

「直接関係しているかどうかまでは分からん。……あつた。」  
「なになに……。未確証。ドイツ。某月某日、議会にて投棄されたはずの案件が正式な認可を受けて施行されていることが発覚。認可書類には強く反対していたA氏。安全のため実名記入を避けるのサインもあつた。しかし、A氏にはサインした覚えなどなく『森羅』の『言靈使い』によるものとみられる。後日調査をしたが、『森羅』が関与した形跡は何一つとして発見できなかつた。……つておい、これ十年以上前のことじやないか。今回のことに関係あるのか？」

加山の指した部分を読み進めた桜華は、胡乱気に問い合わせた。

「それだけなら何とも言えんが、こつちも加えればどうだ？」

次に加山が示したのは千冬の資料であつた。……より詳しく言うならば、千冬が教官を務めた部隊に関する資料である。

「……なるほどな」

桜華は加山の言葉に同意した。一つの資料が重なつたのである。

「いつのまにか施行された『人造兵士生産計画』。それによつて生まれた兵士が、今度は十年以上の時を経て『織斑千冬』の教導を受ける……か。フン、出来すぎにも程がある。そして」

言いつつ、桜華は『騎士団』の資料を取り出し田に向ける。

「……いつも加えればもつとだ」

一年前、桜華が関わった『騎士団』の事件。

桜華は思い出す。一年前の出来事を……。

大半のものには無関心な桜華でさえ未だ忘れられずにいる、ある男のことを……。

血りを『疾風』と称した、『騎士団』の戦士を……。

仕事で訪れたその街を散歩していたときのことである。桜華は一人の男に目を留めた。……それは本当に珍しいことだ。確かにその男は全身で『自分はいま不機嫌です』と言い表さんばかりの態度を取っていたが、それだけなら桜華は気にすることもない。

しかし、現実として桜華はその男に目を留めている。……桜華自身気付いていなかつたが、その男には目を留めるだけの意味がある、ということを表す行為だつたのである。

男も目を向けられていることに気付いたのだろう。面倒くさげにその目を桜華に向け

「ハツ……！ こいつは重置だ！ 悪いが……ちつとばかし付き合つてもらうぜ、『ホーリー・ピンク桜色の魔祓士』さんよおつー！」

直後に態度を一変させた。嬉々として言い放つなり、その男は桜華へと迫る。

「な……！？」

桜華は驚きつつも、遮り無いその一撃を回避した。  
アイドルという仕事をしていれば、性質の悪いストーカーに出会うこともある。……故に、街中で飛びかかるだけならば、珍しいと言えば珍しいが、桜華には経験があった。

しかし、流石にこれは初めてだつた。

飛びかかる間にも、男を包むように鎧が形成されたのだ。世を騒がせているエヒとも違つ。……どちらかと言えば靈子甲冑に近しい。

「何だお前は？ ついでに『いつとその鎧は？』

即座に身を起こした桜華は、いつでも抜き放てるように刀を構え油断無く問い合わせる。

「ハ、流石だな。本気じゃなかつたとはい、今の一撃をよく躊躇もんだ。……とは言え、確かに今の行いは俺に非がある。すまなかつたな。気の乗らねえ仕事でムカついてたところだつたんだ」

男は桜華に賞賛を浴びせ、直後に謝罪した。……頭を下げる」とはしなかつたが。

「では、名乗らせてもらおう。俺は『騎士団』が一人、ゲイル。『ホロウ・メイヘル虚ろな鎧』・『シルフィード』を纏いし……疾風だ！」

言つなり、男 ゲイルは再度桜華へと向かつ。その手には刺突剣。『疾風』を称するのは伊達でないことが、その速度は先程よりも尚速い。

「チツ……！」

桜華は舌打ちし、跳躍。この速度を前にしては、たとえ相手の刺突剣を弾くことが出来てもはねられてしまつ。

「良い判断だ！……だが、甘えつ！」

並外れた速度だといつのに、ゲイルもまた即座に跳躍。勢いのままに蹴撃を放つ。……その姿には、何ら負荷をおつた様子が見られない。

「が……つー？」

桜華は愛刀『荒鷹』で直撃を防いだものの、如何ともし難く吹き飛ばされる。

「チッ……。ヤリすぎちまつたか……？」

それを見て、ゲイルは落胆したように舌打ちする。

「つお……つー？」

その直後、走る斬撃にはね飛ばされた。

「つて～な、おい！一体何だつてんだ……？」

ゲイルは首を傾げる。確かにあの斬撃は払つた。……しかし、刃が素通りしてしまつたのだ。

「破邪剣征・桜花放神。自らの狙つたものにだけ威力を伝える、『破邪の剣』の初伝だ。……少なくとも、これが出来なきや『靈剣・

『荒鷹』に認められる」とはない。……情報不足だつたな？」

言いつつ現れたのは桜華だ。服は所々破け、血も流れているが、その足取りはしつかりしている。

「さて、許可は下りた。……お前が『虚ろな鎧』とやらを纏うなら、こちらも纏わせてもらひとする。靈子甲冑をなあつ！」

時代の流れと共に進展する技術は、過たず靈子甲冑にも適用されている。その中でもISに用いられている量子格納技術は特に大きい。流石にそれそのものはISニアに組み込まれてるので用いられないが、着眼点として多大な恩恵をもたらしたのだ。

ISを独自の力で開発した篠ノ之束は確かに天才である。彼女に比べれば、華撃団の整備陣・開発陣は劣つてゐるだらう。しかし、個人としては劣つていても、総体としては決して劣つてゐるわけではない。

それがここに証明される。

桜華の咆哮に答えるかの如く、足を、腕を、そして頭部を……身體全体を光が包む。それは徐々に薄まり、完全に光が消えたとき、彼女の全身は桜色の鎧に覆われていた。

「さあ、戦ひうか？ 先刻までのよつて楽にいくとは思ひなよ？」  
「フン……上等だ！」

時に地面を、時に壁を、時には中空さえもを足場にして二人は打ち合いながら移動する。

「おい！ お前……どうして手を抜いている？」

打ち合いながら、桜華は問い合わせる。……桜華はそう言つが、ゲ

イルの刺突はまさに閃光の如しだ。端からはとても手を抜いているよつには見受けられない。

しかし、桜華の言葉は正しかつた。……ゲイルは特段、攻防に手を抜いているわけではない。それでも、その意識はこの戦闘だけに向いているわけではなかつた。

必倒の意志がない。必殺の意志がない。……それは、手を抜いているのと同義である。

「言つたろ？ 気の乗らねえ仕事でムカついてたつてよ。……『騎士』つてのは忠誠誓つてナンボのもんだが、それだけじゃねえ。民を、力持たぬ弱き者を護ることもその本分だ。上が何を考えてやがるのかは知らねえが、今回の仕事はその弱者を巻き込むことだ。……それが俺には我慢ならねえ。だが、諫めの言葉も届かねえ。こうなつちまうと、立場上、俺自身にはどうすることも出来ん。……出来んが、だったらどうにか出来るヤツを放り込みやあ良いだけの話だ」「……なるほど。つまり、私はお前の怒りの捌け口にされたと同時に厄介事を押し付けられるわけだ。まったく面倒な……。だが、まあ良いだろう。お前みたいなヤツは嫌いじゃない」

「助かるぜ。……これからお前を飛ばす。あとは上手いこと頼んだぜ？」

剣を打ち合いながらの、その会話。『騎士団』と『華撃団』とう、本来ならば敵対関係にある者同士の会話として、それは奇妙な会話だつた。

この短時間で友情など生まれるはずがない。信頼など出来るはずがない。……それでも、互いが互いにそういつたモノを感じていることは事実だつた。

「いぐぜー。」

「ああ

ゲイルの蹴撃を足場に、桜華はその建物へと突撃。そして中にいたヤツらを片付けて

「ああ。思い出した。そうか、あの時の少年か……」「……と、言つことは?」

「そうだ。一年前の『騎士団』事件の際、幽閉されていたのが織斑一夏だ」

「分かった。この件は俺から司令に報告しておくれ」

加山を見送りながら、桜華は決めた。

「明日……は無理だから明後日か。織斑一夏に会いに行つてみるとしよう」

眩き、桜華は惰眠を貪ることにした。

「すまないが、織斑一夏君……であつてるかな?」

HS学園へと赴いた桜華は、その生徒へと問い合わせた。

「はあ……? 確かに俺は織斑一夏ですけど……」

返事は肯定。……それを確認した桜華は話を進める。

「総一から話を聞いてね。もしよければ、これから手合させしてくれないか？……ああ。自己紹介がまだだつたな。私は真宮寺桜華といつ」

「ああ……！　聞いてます、聞いてます！　何でも北辰一刀流の免許皆伝だとか！？」

「ははっ、君は面白いな。真っ先に出てくるのがそつちか。大抵の場合、仕事の方で驚かれるんだが……。まあそれはともかく。都合はつくかな？」

「ええ、大丈夫です。いつも手合させをお願いしてるヤツが部活に強制招聘されてしまつたんで、正直どうしようかと思つてたんですよ。……手頃な場所に案内するんでついてきて下さこ」

一夏の後を桜華は追う。……道中、特に会話らしき会話もない。

「そら、どうした？　どうから打ち込んで構わないと？」

実際に桜華は言つ。その立ち姿はまさにぞんざい。構えらしい構えも取つていない。

その一方で、一夏はまったく動けない。動く様子がない。……動きたくても動けないのだ。

目が霞む。冷や汗が止まらない。歯がカチカチと音を鳴らす。そう、桜華の放つ殺気に一夏は完全に呑まれていた。

これには桜華の気性も関係している。

基本的に桜華の戦闘は殺るか殺られるかだ。剣を執る理由が理由なのだから、こればかりはどうしようもない。

仲間内で手合わせをする際にはその限りでないが、基本的には殺氣全開である。

「ああ、やつが……。」れなりじつだ~。」

その事実に、桜華自身よりやく思ひ至つたのだらう。

仲間の中でも「テキない方に分類される相手との手合わせを思ひ出しながら、桜華は静かに殺氣を弱める。……消すのではなく弱めるのがポイントだ。完全に消してしまえば、耐性がつくことも無いからである。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

地面上へたり込み、一夏は荒く息を吐く。 まだ若干戻しき  
けど、今のに比べたら万倍マシだ。

「はあ……はあ……こか……のは?」

呼吸を繰り返し、ある程度落ち着いてから一夏は呟ねる。 生  
きた心地が、まつたくしなかつた。

「すまないな。つい、こつものよつに殺氣を全開にしてしまつた  
「わ~か……こか……のが……」

その返答を聞いて、一夏は納得した。 篓との手合わせとは違う。総一と手合わせしたときよつもなお空氣が重苦しかつた。今のが殺氣だといつなのら、それも当たり前か……。

「どうする? 上めておくか?」

「いや、続ける。やつをの殺氣に慣れさせてくれ……」

「……分かった」

血跡では面白こじとを言つたつもつだが、どうやら外してしまつ

たらしい。呆れたように頷く桜華を見て、一夏は思った。

それからは、ただ時間だけが過ぎていく。

時折、遠くから部活のものと思しき喧騒が聞こえてくる。

場面だけを見れば、実に長閑な一刻だ。

しかし、その実態はまるで違った。

一夏を見ればそれが明らかである。その冷や汗は、治まるどころかゆづくらと勢いを増していく。

そう、一夏はまるで殺気に慣れていなかつた。

だが、それは一夏の問題ではない。様子を見つめ、桜華が徐々に殺氣を増しているからである。

桜華自身このよつなまどひつこしいやり方など好みではないが、出来ないわけでもないのだ。……ならばやらない理由など無い。

戦闘という御馳走を頂くための事前準備だと思えば、この程度はあるで苦にならないのである。

そして

「すみません。待たせました」

自身でも知らぬ間に、一夏は桜華の殺気に完全に慣れてしまつっていた。

それは、普通には考えられないほどである。

慣れるまでの異常な速度。……一夏の異常性を指し示す一端であった。

「もう慣れたのか……？ まったく……。私も大概イカれてるが、お前も負けず劣らずだ」

その事実は、桜華にも呆れをもたらす程であった。

「来い……！」

今度こそしっかりと構え、桜華は言い放った。

「こきます……！」

それに応え、一夏が駆ける。  
打ち合つ音だけが響く。

一夏の攻撃は、一度たりとも桜華に届かない。その全てが或いは  
躱され、或いは防がれている。

距離が離れ、間をおかず一夏は駆ける。

そして

「ぐう……っ！」

「え……？」

桜華の苦悶と、一夏の呆けた声が重なった。何のこ  
とはない。端的に事実を示すなら、単に桜華が無防備に一夏の一撃  
を受けただけのことである。

「え……？ なん、で……？」

一夏は現実を認識できない。したくない。

「宿題だよ」

「しゅく、だい……？」

「剣を続けるつもりなら、この恐怖を乗り越えろ。……分かつたか  
？」

「……………分かつた」

かなりの時間をおいて、一夏はようやくそれだけを口にした。

「それじゃあ、またな。……あ、そうそう。今の一撃、実に良か  
つた」

そう言つて桜華は去つた。……呆ける一夏をその場に残して。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4466y/>

---

IS VS 霊子甲冑

2011年11月17日19時23分発行